

1. はじめに	重村 幹夫	1
2. 公開講座・講習会		
生活と環境セミナー		
「鈴木康広『近所の地球』から見えてきたこと」	鈴木 康広	2
幼児教育公開講座		
「おもちゃインストラクター養成講座」～遊びの専門家になろう～	青井 夕貴	8
食育推進事業		
平成26年度仁愛食育講座	岸松 静代	11
保育者ワークショップ		
「文字遊び～小学校との連携を考える～」	前田 敬子	14
「身近な素材でおもちゃをつくろう」	香月 拓	18
新人保育者スキルアップ講座	幼児教育学科	20
幼教フォローアップ講座	幼児教育学科	21
「ipad 基礎講座」「Microsoft Excel講座」	情報メディア教育支援室	22
3. 地域連携		
地域連携開放講座	内山 秀樹	23
森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携事業報告	重村 幹夫	25
森田公民館における幼児向け英語教室	野本 尚美	27
4. 多文化体験プログラム		
仁短祭でのロッキーナ先生との交流とロッキーナ先生と「Englishであそぼう」講座	生活情報専攻生 野本 尚美	28
5. 福井市まちづくりセンター「ふく+」の活用		
おもちゃサークルの「おもちゃであそぼう」	香月 拓	29
なま種 18 with 仁短ゼミ発表	田中 洋一	30
6. 福井市家庭子どもセンター		
AOSSA子ども家庭センター・子育て支援室・相談室（平成26年度）	青井 利哉	31
7. 学生の社会的活動報告		33
生活環境専攻		
幼児教育学科		
8. ボランティア活動報告		39
パソコンボランティアサークル		
ユネスコサークル		
栄養研究サークル		
幼児教育学科		
ボランティアサークル+幼児教育学科有志		
ボランティアサークル		
折り紙研究会		
おもちゃサークル		
9. 平成26年度地域活動実践センター活動報告		44
1 管理栄養士国家試験対策リカレント講座		
2 講師派遣		
3 学生の社会的活動の実績件数と参加人数の報告		
4 平成26年度教員免許状更新講習		
10. おわりに		47

はじめに

人と人とのつながり

地域活動実践センター長 重村 幹夫

「鮭」で有名な高橋由一（文政11年－明治27年）は、日本の近代油画の基礎を築いた重要人物の一人である。彼は、晩年病床にある時、息子源吉に回想録『高橋由一履歴』¹を口述筆記させた。これは、当時の油画事情を窺い知る事の出来る史料であるが、その内容は実に愉快である。

由一は生まれつき病弱で、家業の武術の教導を継ぐことは出来なかった。ある時、洋製石版画を観て絵の道に進みたいと思ったが、なかなか学ぶ機会が無かった。八方手を尽くし、知人に幕府の洋学研究機関である洋書調所画学局への紹介を「雀踊ノ余り厚ク」委託し、文久2年に入局がかなった時は、「天ニモ昇ル心地」であった。当時は、「天ニモ地ニモ」油絵など観ることが無かったが、先輩局員が石版画を模写した油絵を観て、局員に「迫リテ」その画法及び絵具の調製法を「丁寧反復」口述を受け、「ヨロコバシサ限りナキ」であった。それ以来、溶き油は、日本在来の^{えの}荏油に鉛を混ぜて太陽に数日間晒した。絵具も在来の顔料を^{うるしへら}漆篋や西洋包丁を削った物で練り上げ、キャンバス張り器にはせんべいを焼く鉄の焼形を加工して用いた。その後、使節船が海外から持ち帰った油画画材が画学局に来た時は、皆自分の物ではないにもかかわらず喜び限りなかった。

慶応2年には、横浜に赴き、油画を学ぶため英人チャールズ・ワーグマンに入門するとともに、油画博物館の構想を持った。実際の博物館活動の素地は明治6年のウイーン万博参加以後のこととされているから、由一の構想がいかに時代に先んじていたかわかる。明治3年には、画学場の設置、学校・展覧所・売却所からなる総合油画会社設立を構想。明治9年、絵具屋に画学局の元同僚の化学者を紹介して油絵具の製造を指導した。

以後も実に旺盛な活動を晩年まで続けている。このように、由一の活動は自身の油画技法の習得にとどまらず、当時の油画画材事情に対応した画材の製造販売、画学場による教育、展覧会の開催など、油画の振興のため多方面で活躍し、その生涯をささげたものであった。由一のバイタリティー溢れる活躍は、油画への情熱とともに、多方面の人脈を駆使した企画力があつてのことであった。

地域活動実践センターは、平成18年に発足した。その設立趣旨について、本誌“SOCIUS”の創刊号には、「地域活動実践センターは、建学の精神『仁愛兼済』を実践するため、短大が保有する知識等の資源を地域社会に提供し、地域社会の発展と文化の向上に資するためにある。それは、産業や行政をまきこんだネットワークをベースとする教育プログラムを構築し、地域をキャンパスとする教育活動、地域をフィールドとする研究活動の展開を通して全体の活性化を計ろうとするものである。」と記されている。

由一の時代とは異なり、現在は物や情報が溢れている。しかし、人と人のつながりの中から新しく物事を企画、実践していく知恵と情熱の大切さは変わらないであろう。

(Endnotes) 1 青木 茂編、「高橋由一油画史料」, 中央公論美術出版, 1984.

生活と環境セミナー 公開講座

「鈴木康広『近所の地球』から見えてきたこと」

アーティスト 鈴木 康広

日時：2015年2月14日(土) 会場：福井市美術館



図① 鈴木康広氏 [Photo : Rinko Kawauchi]

今日のスライドは370枚くらい入っています。この2時間で、自分がどんなことに興味があって、今活動していることを、なるべく皆さんの中にあるものと繋がるように、紹介できればと思います。(図①)



会場の様子

(中略)

僕にとっては人生を変えた、グローブジャングルという地球の形をした遊具のことをお話ししましょう。

NHKのデジスタという番組で「街の中でこそ魅力を発揮するメディアアート」というテーマの作品公募がありました。僕はそれにどうしても応募したく、街中をずっと探しまわっていました。でもなかなか見つからず、ほとんど諦めかけていたところ、目の前にこの遊具が回っていました。大学時代に映像表現や残像に興味があり、その残像現象を利用して、夜に映像が映りそうだと思いつき、応募したところ審査に通ってしまいました。それを番組の中で紹介され、作品が世の中に出ました。一般的に作品制作は、一から素材を加工してつくると思いがちですが、この作品は僕がつくったわけではなく、グローブジャングルという元々あるものを活かし、皆の中の記憶によって作品が機能したり生きてくることで、面白い作品になることに気づきました。このことに気づくまで、何年も時間がかかってしまいました。



図② 『遊具の透視法』 [Photo : Rinko Kawauchi]

日中に遊具の中から撮影した公園の景色を、夜間にグローブジャングルに投影したところ、まさに「地球」に見えました。(図②) 空の青と、木々の緑と、大地の色と、家族まで投影されています。地面から少し浮いた状態で、いい感じの絶妙な瞬間の「地球」が映っています。

だんだんと、地球について勝手に考え始めました。教科書に載っていることや科学的な視点は、一部分のものの見方で、むしろそうではない見方を見つけることが楽しいです。「そうかもしれないね」と共感する人がいたなら、個人の思い込みではない新しいアートの世界が立ち上がり、その状態を非常に魅力的に感じています。

ある日、遊具で遊ぶ子供たちの影が「大陸」に見えました。しかも動く大陸として「プレートテクトニクス」までも見立てることができたのです。遊具デザイナーは全く意図していなかったでしょうね。でも、意図していなくても、デザインしたものを越えた計り知れない状態に、僕は最も魅力を感じます。

(中略)

美大に入って、まず僕がしたのはパラパラ漫画作りです。これはもう子供時代の再来です。きっかけは、ある日、友達にパラパラ漫画を作って持って行き「面白いね」と言われたのが嬉しくて、単純ですが、次の日また持って行ったことでした。何日かして友達から「今日は無いの?」と聞かれたので、つい100冊ぐらい描いてしまいました。

僕はノートに数ページ描いたら、数ページとばし、描く場所を変えますから、逆にそれがいいたいです。大胆にとばすとその都度、描く方向だけでなく考えが変化する可能性も出てきます。パラパラ漫画だと、意味のある変化をキープするのは結構難しくもあります。次のページも一気に描いてもいいし、変えてもいいし、重要なのは変化の状態を常に保つことで、パラパラ漫画だけでなく、普段の生活の中でも適応し、常に変化可能のようにしています。すると意外なことがどんどん起きます。だからこれがアイデアを思いつくための一つの手法とも言えます。でも、これはそう簡単なことではなく、何年かかると思い

ますが、いつか必ずできるようになると、僕は人間のサンプルとして確信を持っています。

パラパラ漫画の白い裏側の透けた部分は、1コマ先とのずれで「あっ!なるほど」という納得した感覚を与えます。それはページとページの間の変化で、絵ではないです。動きとして見ているのは2つのページ間にある変化です。このように飛躍し、次元を超えるこの瞬間が僕にとってはたまらなく楽しいです。こうした視点が、メディアアートやメッセージになるなど、遊具の作品もそういうところに繋がっていきます。

(中略)



図③ ノートブック

僕の活動に欠かせないのがノートです。ずっと同じノートを使って、今300冊くらいになりました。

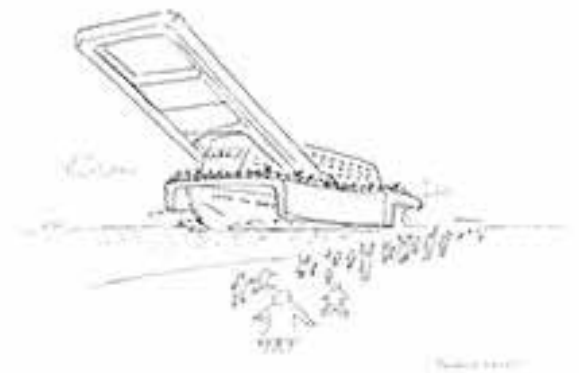
ノートからは、時間というものを排除しています。過去のノートということもなくして、開いたページにかきます。開くと、前にかいたイメージが自然に出てきて、それに今の自分が反応し、何かかきたくなります。このようにイメージを少しずつ積み重ねていきます。一気に何かを思いつこうとしても絶対思いつきません。自分の意識を瞬間的に越えて「こう見えてしまった」みたいに思いつくしか、意外なことは生まれないので。(図③)

今はデジタル化していて、メモを携帯や写真で済ますことが多いですが、肉筆でかき残すたびに、ひとつの現

象として残るので、やはり肉筆が重要だと思います。今、武蔵野美術大学で教員もしていますが、美術系とかデザイン系の学生は、油断していて肉筆でかき残そうとしない、と思うことが多々あります。

(中略)

羽田空港発の国内線の窓から、東京湾をはしっている船の波がファスナーに見えてしまいました。それでラジコンの船を改造し、池でファスナーを開くように見えるか実験しました。池にはカモとアヒルがいて、ラジコンの『ファスナーの船』と並んで、3つのファスナーの勢揃いです。(会場：笑)中でも、アヒルが一番きれいなファスナーに見えました。アヒルは結構深いところで漕いでいるので、余分な波が出ずに純粹にきれいな引き波が出せます。だから、このアヒルを見習い、もっと深いところにスクリューを設置しなさいとの神様からのヒントだったのでしょう。



『ファスナーの船』イメージスケッチ

2002年に船と波がファスナーに見え、2004年に『ファスナーの船』をラジコンで作り、2009年に本物の船の制作を開始しました。それから何年後かに瀬戸内芸術祭があり、一般公募で応募しました。結果は落選でしたが、そのディレクターの北川フラムさんにお会いした際、すごく面白いが、実現性が低いのでは?と言われました。僕の考えるアート作品は、実現しそうな世界と、実現しなそうな世界しかなく、なんとか実現できる世界にもっていかない

といけなかったと思います。

ちょうどその頃、原美術館の方から造船所の社長さんを紹介していただきました。社長が船をあげると言ってくださり、僕なりに安全性は最重要視しつつ実現を決意しました。「船が見つかりました」と北川フラムさんに連絡し、先のラジコンの船も持って相談にうかがったところ、ようやく僕が本気であることが伝わり、一気に実現に向かいました。

素材は発泡スチロールで、発泡スチロールを掘る最高の職人が静岡県富士にいらっしゃるの、その人に相談をして造りました。中に鉄骨も入っています。部分的にFRPや、アルミ板を使っています。全長11m。11人乗れる船として実現しました。芸術祭では、風が弱い日など、かなり限定した日でしたが、きちんとお客様を乗せて、運航することができました。(図④)



図④『ファスナーの船』

いろいろな人から「よく実現したね、本当にできると思わなかった」と言われました。とにかく僕が実現したい気持ちを誰よりも強く持っていなければすぐに終わり、実現できなかったことでしょう。ポイントは実現したい人が他にも居るかどうかなと思います。さらに、どうやらできるかということ、誰よりも考えていました。技術者というのは安全性など今までの方法で実現しようとするので、実現するのは結構難しいです。完璧なものしかつくれないからでしょう。だけど僕はもう少し緩やかな判

断ができます。職人や設計者が思いつかないような技術的な組み合わせを、自分なりに考えて提案して「それいいね」と思ってもらわないと、みんな簡単に諦めてしまいます。だから、どうやって皆をやる気にさせられるかが、デザイナーとして必要な能力なのかもしれません。技術者は、経験値でいろいろ考えてしまいますし、それは凄く確かなことでもあり、やる気になるには経験者ほど難しいです。

いい意味で、好い加減で実現したい気持ちが無いと、フレッシュなものとか、新しいものは生まれないと思います。その好い加減を探すのが、皆さんのような若い人のこれからの課題だと思います。前例がはびこる世界なのでパイオニアは意外と楽で、未経験なだけにやる気になります。

(中略)



図⑤『まばたきの葉』スケッチ

未来に「もしも、こんなものがあったら」というテーマのコンペの時に僕が発表したのが、『まばたきの葉』です。(図⑤) この先、人類が木ともっともっと長く生きていくと、木が人間のことを覚えるようになるかもしれないと考えました。ちょっと空想的な話に聞こえるかもしれませんが、自分の中で現実的に捉えて考えたものです。木が、毎日通る人の顔を覚えて、秋になるとその人の目を浮かび上げ落葉します。葉はクルクル回って、その本人と目が合うというシーンのプロトタイプとして作り発表しました。その後、

植物や人間以外と関わりを持つ人のことを考えて、造形的にもきちんと作ったのが今の状態です。(図⑥) 樹齢12年で、何度も展示をしていて本当に不思議な「木」です。



図⑥『まばたきの葉』 [Photo : Katsuhiro Ichikawa]

花火を打ち上げて街中に大きな木を浮かび上がらせた絵で、食べられる紙で作ったり、土に還る紙で作ったりすれば、地球の害にもならず、鳥たちのためにもなると思っています。これが「まばたき」と「はばたき」が出会った瞬間です。(図⑦)『まばたきとはばたき』は2011年に出した本のタイトルになりました。変なタイトルだと今でも思っていますが、当時は自然に決まりました。



図⑦ 「まばたき」と「はばたき」が出会った瞬間のスケッチ

最近、「デザインあ」が一般化したからこの発想は当たり前になりました。「ま」の文字の分解は、横棒を1本動かして、文字の左に縦に置けば「は」になるため、「は」と「ま」の関係は近いことになります。

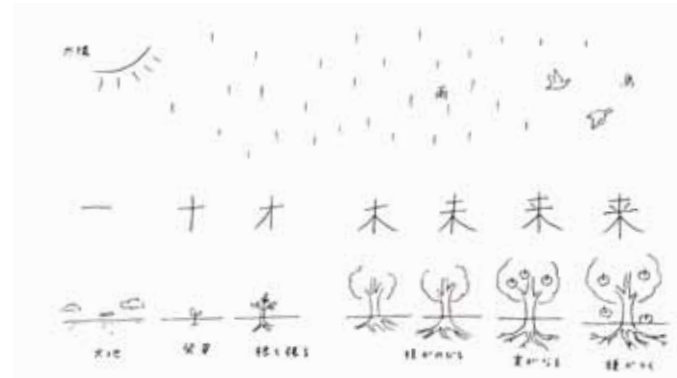
『まばたきの葉』は、いろいろな国で展示していますが、イスラエル出身のアーティストに会った時の話が不思議です。日本では、まばたきは目をつぶりますが、イスラエルのヘブライ語では「瞬間的に見る」という意味だそうで、『まばたきの葉』の落葉時に目と目が合うことと繋がり、鳥肌が立ちました。このように知らない国の言葉と作品が繋がるのは、もしかして、人間には特別に思えるけど地球にとっては当たり前のことかもしれません。

この話を聞いてから約2週間後にイスラエル美術館のキュレーターが僕のところに来て、イスラエル美術館で展示をすることになり再び驚きました。

(中略)

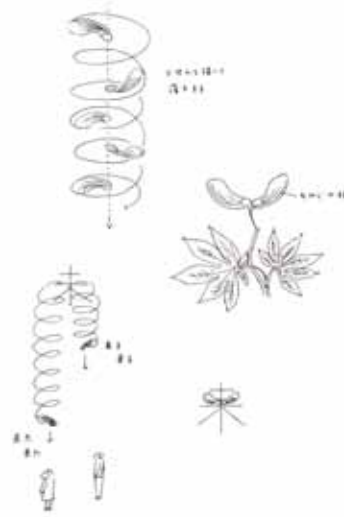
「未来」の描き方を考え、未来の中に「木」があることに気づきました。「一」「十」「オ」「木」の左右のシュツシュツとはらう部分は根っ子を表し、木の幹は縦棒一本でシンプルです。そして、「木」に横棒一本を加えると「未」になり、横棒が枝だそうです。「未」にチョンチョンと点を2つで「来」になります。このような「未来の書き順

を考えました。先日、小学校の校長先生にお会いして、書き順について教えていただきましたが、書き順には決まりは無いそうです。なので、順番を変えるだけで、意外な考え方に展開可能になる感じがしました。



図⑧『未来の書き順』

更に解説すると、大地、芽が出て、根を張り、枝が伸びて、実が成ります。(図⑧)「未来」という漢字が木の成長を表していることを知り、感動しました。それで最近、僕の勝手なこじつけをしまして、この「来」のチョンチョンに見覚えがあるなと気づきました。それはモミジです。モミジの種は鳥の羽のような形で、生えている時は逆さまですが、落ちる時はクルクルと回って、見ていて飽きません。螺旋を描く様が美しいです。なるべく遠くに、意外な所に行くために、クルクル回って落ちて来ます。まさに未来へという感じです。しかも「来る来る」で、さらに、人に近づくと「来た来た」になります(会場:笑)。(図⑨)



図⑨「来る来る」「来た来た」スケッチ

『現在／過去』という判子^{はんこ}の作品を制作した頃は「未来」が嫌いでしたが、今は「未来」に興味があります。

「未／来」が「現在／過去」ではなく、「未」はどうなるか分からない状態のことで、「来」は『まばたきとはばたき』が本の題名になったり、未熟だった自分が15年経って『近所の地球』のように自分の展覧会のタイトルに成る体験などを表します。「未／来」の間隔は、実際に現実に変わるであろう時間の経過を示していて、それらを判子^{はんこ}という形にできたと考えています。

ということで、12分過ぎてしまいました。スライドは372枚ご覧いただきました。長い時間ご清聴ありがとうございました。(会場:拍手)

会場では、水戸美術館の個展の鈴木康広氏直筆マップが、プレゼントとして配られたことを、最後に申し添えます。

幼児教育公開講座

おもちゃインストラクター養成講座
～遊びの専門家になろう～

日時：2014年5月24日(土)13:00～16:00、25日(日)10:00～16:00
講師：荒木舞(おもちゃコンサルタントマスター)



NPO法人グッド・Toy委員会認定

◆ 講座要項掲載内容 ◆

● 1日目 ●

講座 1 おもちゃインストラクターはじめの一步
子どもに接する現場での役割や意義を通して、おもちゃインストラクターの心構えを学びます。

講座 2 子どものおもちゃ学入門
子どもの成長・発達とおもちゃの関係から、現代の子どもの生活までをおもちゃや遊びを通じて学びます。

ワークショップ 1 画用紙は手作りおもちゃの魔法の材料
1枚の画用紙から「江戸からくり玩具」3つを作る不思議な不思議な魔法のワークショップです。

ワークショップ 2 牛乳パックはおもちゃの材料の王様
牛乳パックを征するものは手作りおもちゃを征します。人気NO.1の玩具に挑戦！

● 2日目 ●

講座 3 手作りおもちゃ・既製品玩具の遊び論
ハンドメイド・Toyとメーカー・Toyの融合を目指す、子どもとの上手な付き合い方を学びます。

講座 4 はばたけ!おもちゃインストラクター
子ども同士、保育者と子ども、親子、祖父母と孫などの様々な人間関係を結ぶおもちゃの多世代交流論を学びます。

ワークショップ 3 新聞紙をとことん楽しむ おもちゃ遊び
身近な素材を使って、様々な遊びを生み出す伝説のワークです。身につければあなたも地域で人気者！

ワークショップ 4 世界のおもちゃで遊ぶ・学ぶ
世界各国の優良おもちゃで遊ぶことを通して、おもちゃを通じたコミュニケーション術を学びます。

昨年度の幼児教育公開講座で、初めて「おもちゃインストラクター養成講座」を開催し、116名の「おもちゃインストラクター」が誕生しました。今年度も引き続き開催することができ、新たに58名の「おもちゃインストラクター」が誕生しました。

今回の参加者は学生が最も多く(67%)となりましたが、保育士や幼稚園教諭、児童厚生員、児童指導員、看護師、役場職員、大学教員など、年齢層も、10代から50代までと多岐にわたる参加者となりました。

講座は、前頁の講座要項掲載内容のように、理論的な部分を学ぶ「講座」と実際におもちゃを作る「ワークショップ」がプログラムとして組まれていました。まさに、おもちゃの魅力や大切さを頭と身体で吸収することができる内容でした。



(写真1) 講師の先生が「六角返し」の見本を見せてくださいました。くるくると面が変わるしかけカードです。大きいので迫力もありました。



(写真2) 「まゆ玉転がし」を作りました。本当に奇妙な生き物に見えます。作る人によって転がり方が異なることもおもしろい！



(写真3) 人型の木のおもちゃ。片手だけでつなげていく…ですが、これがなかなか難しい！集中力と創造力が必要です。

本講座に関して、参加者の方にたくさんの感想をいただきました。以下に、その一部を抜粋してご紹介します。

- 一つの材料をもとにして、色々なおもちゃができることを学ぶことができたのでよかったです。また、楽しみながら作ることができたことも満足です。
- 身近にあるものから様々なおもちゃの作り方を知ることができました。また、知らないおもちゃをたくさん知ることができた。
- たくさんのおもちゃを作ることができるようになりました。このような機会がなかったら、手作りおもちゃを作ろうなんて思わないし、難しくてできないと思って作らないと思います。
- 現場で実践できるようなおもちゃ(身近なものを使って)の作り方を教えていただき、子どもたちの状態などに合わせて工夫して、工作の時間などで取り入れていけることが多くあり、とても勉強になりました。
- グッド・Toyについて数多く知りえたことが満足です。また、手作りおもちゃの作り方、それを相手にどうやって伝えていくかのノウハウを頂きました。
- 子ども達におもちゃを与える(選ぶ)視点がよくわかりました。また、手作りおもちゃを作る楽しさ、面白さ、色々なことを学びました。講義だけでなく実践が盛りだくさんで、実際に手を動かし、体を動かし、子どもの気持ちに近

づいて感じることができました。

- 8時間の短い講座の中で様々なおもちゃ(知っているものもありますがほとんどが初めてでとても新鮮でした)と出会え、とても充実した時間でした。
- 色々なおもちゃを知ることができて参考になった(展示されていたもの)。ワークショップも早速児童クラブで子どもたちに教えてあげようと思いました。
- 知らない人とコミュニケーションを取ることがこんなにも楽しいのかと知りました。教えていただきありがとうございます。
- 私自身は描くことが苦手なのですが、今回はそんな私でも負担にならない程度だったのがありがたかったです。
- 外国のおもちゃに触れることができて良かったです。
- これから保育士になった時に「こうしたらいいかな」とイメージのようなものがたくさん浮かびました。
- 手作りで音が鳴るおもちゃを知りたいと思いました。遊びにはそれぞれ意味があり、人によってさらに広がっていくのが面白いと思いました。
- 手作りおもちゃがとてもわかりやすく、私自身も現場に戻った時に今回の先生をお手本に子ども達にも遊びを広めていけたらと思います。
- 講師の方の話し方、トーン等とても聞きやすかったです。説明も要点をわかりやすく話されていたので良かったです。

- 肢体不自由の方が楽しめるようなおもちゃにはどのようなものがあるか知りたいと思いました。
- 子どもと遊ぶ以外におもちゃの持つ可能性（シニア時

代での活用など）をもっと聞きたかったです。特に福井は高齢化率も高い県ですので、皆興味があると思います。
（文責：青井夕貴）



（写真4）紙コップとかさ袋で「びっくり箱」を作りました。何が出てくるかも楽しみですが、息のふき方によって出てくる様子にも個性が出ます。



（写真6）新聞紙の棒を倒さずに隣へ移る「せーの!」をしました。2日間共に過ごしたおかげで、息はぴったり!全員でも大成功!



（写真5）2日目には、教室を飛び出して広い場所へ!新聞紙と紙皿を使って「皿回し」をしました。みなさん夢中です…



（写真7）最後は、講師の先生が修了証を1人ずつに手渡ししてくださいました。

食育推進事業

平成26年度 仁愛食育講座

仁愛女子短期大学 教授 岸松 静代

1. はじめに

今年度は4回シリーズで同講座を開催しました。定員20名で募集し、本学教職員2名と学生3名が指導及び補助をする体制で、土曜日に実施しました。

2. 講座内容

【第1回】 5月17日（土）

- 春キャベツとハムのグラタン
- 新玉ねぎのサラダ
- 苺のパバロア

（参加人数／12名）

春の食材を使った西洋料理です。旬の春キャベツはやわらかくて甘味があり、加熱するとより甘味が増します。ハムやチーズと合わせることで旨味が増し、美味しいグラタンになります。

辛味の強い玉ねぎですが、新玉ねぎは辛味が少なく、水分を多く含んでいるため、生で美味しくいただけます。旬の時期ならではの一品です。そして苺のパバロアの桃色が、やさしい春の食卓を演出してくれます。



【第2回】 9月20日（土）

- 茗荷ご飯、魚の包み蒸し
- 茄子の枝豆和え
- 黒砂糖のくず羊羹

（参加人数／16名）

夏の日本料理です。暑い夏でも、さっぱり美味しくいただける献立です。茗荷というと、そうめんの薬味や酢の物によく用いられますが、炊き込みご飯にすると、ホクホクとした食感で、生で食べるのとは違った味わいになります。参加者の皆さんも驚き、とても美味しいと感動してくれました。

魚の包み蒸しは、様々なアレンジが出来る料理です。今回は鮭を使いましたが、その時期旬の魚を使い、チーズやマヨネーズ、豆板醤やごま油などで味付けを工夫するだけで、幾通りもの料理に変身します。また、暑い日にも火を使わず、オーブンや電子レンジで簡単に出来ます。枝豆をすりつぶして調味した和え衣は「ずんだ和え」とも呼ばれ、宮城や山形の郷土料理として知られています。だしで煮た茄子に甘い和え衣を合わせ、冷たく冷やすとより美味しくいただけます。そして、夏に食べたい冷菓は、羊羹にしました。よく食べられている羊羹は寒天を使いますが、くず粉を使うことで、もっちりとした食感の羊羹になりました。黒砂糖のやさしい甘味が後を引く美味しさです。



【第3回】 10月4日(土)

- えびのチリソース炒め
- いかの中華風酢の物
- あん春巻き

(参加人数／16名)



秋の中国料理です。人気のあるえびのチリソース炒めですが、コツをしっかりと覚えて作るとより一層美味しく仕上がります。ポイントはえびを一度揚げることです。旨味を閉じ込め、食感をよくします。中華風酢の物のいかも、卵白をつけて茹でることで、旨味を閉じ込められます。このひと手間が、美味しい料理を作るためのコツです。

デザートのだんご春巻きは、春巻きの皮でだんごを包んで揚げるだけの、手軽な一品です。中の具をチーズや果物に変えるだけで、様々な味を楽しめます。

今回参加していた小学生の女の子が、初めての揚げ物に挑戦しました。初めは不安そうでしたが、上手に揚げる事が出来てとても嬉しそうでした。家庭では心配でさせてあげられないことも、このような機会に体験することで、自分に自信がつき、料理の楽しさを知ることが出来ます。これからもぜひ、色々な料理に挑戦してくれると嬉しいです。



【第4回】 12月6日(土)

- 鯖のムニエル、
- オニオングラタンスープ
- 長ねぎのサラダ
- スポンジケーキ

(参加人数／23名)



冬の西洋料理です。「秋鯖は嫁に食わすな」と言われるくらい、脂がのって美味しい鯖をムニエルにしました。バターで焼くことで魚臭さが消されます。また、さっぱりいただけるように、酸味のあるトマトを使ってソースを作りました。

オニオングラタンスープは、玉ねぎをじっくり炒めることが重要です。甘味が出てとても美味しくなります。玉ねぎのスープに、フランスパンとチーズを乗せてオーブンで焼きます。とろりと溶けたチーズがパンと玉ねぎに絡み、旨味が口いっぱいに広がります。是非熱々を食べてください。心も体も温まります。



ねぎのサラダなんて想像がつかないと、皆さん驚いていました。ねぎは生では辛味がありますが、茹でたものをサラダにするので、甘味が出て食べやすくなります。冬野菜は体を温めてくれるので、風邪の流行るこの時期には特に食べてもらいたい食材です。

12月になると出番の多くなるスポンジケーキですが、やはりお店で購入する方が多いようです。今回は、スポンジ生地から作り、デコレーションまで行いました。生地はしっかりしたメレンゲを作って混ぜる方法で作ります。どのくらい泡立てたらよいのか、生地が膨らむか心配しながら焼いたスポンジは、どれもしっかり膨らみ、美味しそうに焼き上がりました。デコレーションの生クリームを泡立て、スポンジに塗っていきます。間に好みの果物を挟んで、綺麗に飾りつけていきます。美味しそうに出来上がっていくケーキを見ながら、とても楽しそうに作られていました。飾り付けには個性が出て、様々なケーキが出来上がりました。自分たちで作ったケーキを食べながら、「ぜひ家でも作ってみます」「家族に作って食べさせたい」と、大満足されたようでした。この講座をきっかけにやってみようと思ってもらえたことが、とても嬉しいです。



3. おわりに

今年は12月の講座の日に、朝から雪が積もっていました。急な事だったため、参加者の方が来て下さるか心配をしていたのですが、皆さん出席してくださいました。雪にも負けないくらい、食育講座は楽しみにされているのだと嬉しく感じました。初めて参加される方も、また来たいというその日に他の日の講座も予約してくれます。補助の学生とも、まるで学校の授業のように和気あいあいとされています。

この講座では、新たなレパートリーを増やせるだけでなく、正しい調理の仕方も学ぶことができ、家庭での調理に役立っているようです。作ってみたいけれどどうしたらいいかわからない、難しそうだから作れないといった料理でも、ここで作ってみることで、コツが分かり、やってみようという気持ちになってもらえるようです。今後も皆さんの刺激になるような講座を開催出来ればと思います。



保育者ワークショップ

文字遊び～小学校との連携を考える～

仁愛女子短期大学 准教授 前田 敬子



1. 幼児教育における文字の位置づけ

現行『幼稚園教育要領』は、文字に関してどのように書いているか。言葉の獲得に関する領域「言葉」（経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う）の「2 内容（10）日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」という部分で、『保育所保育指針』も同様である。「環境を通して育てる」ことを基本とするため、解説書にも以下のように書かれている。

幼稚園生活の中で、名前や標識、連絡や伝言、絵本や手紙などに触れながら、文字などの記号の果たす機能と役割に対する関心と理解が、それぞれの幼児にできるだけ自然な形で育っていくよう環境の構成に配慮することが必要である。また、それぞれの幼児なりの文字などの記号を使って楽しみたいという関心を受け止めて、その幼児なりに必要感をもって読んだり、書いたりできるような一人一人への援助が大切である（『幼稚園教育要領』解説書）。



最も早く認識する文字は様々な物に記されている自分の名前であり、その文字が自分自身を示していることに喜びを持ち、保育士等と呼ばれる名前と文字で表されている名前を照合させていきます。そして、友だちや身の回りの人の名前や物の名前を覚え、それらを表す文字に興味や関心を抱いたり、いろいろなところに文字や記号を見つけ、確認してきます。また絵本や自分の連絡帳、室内外の様々な表示や文字を見たりする中で、自ら真似てかいてみようしたり、保育士等にかいてもらったりして文字に親しんでいきます。

お店屋さんごっこや郵便屋さんごっこのように、文字や記号のやり取りのある遊びを楽しみながら、文字などに親しみ、保育士等や友達と文字で伝え合う喜びが芽生えていくよう見守ることが大切です。また、画材や筆記具などの用具や室内の環境設定にも十分配慮していきます（『保育所保育指針』解説書）。

上記の通り、幼児教育では「自然な形で育っていくよう環境の構成に配慮」し、子どもたちが「遊びを楽しみながら」「興味や関心を抱き」「必要感をもって」「自ら」読んだり書いたりしようとするような援助を基本とする。

しかし、実情は、子どもによって文字に対する興味関心に幅があり、興味を持つ子は家で覚えて進んでいく一方、興味をもたない子は就学前になっても興味が無い。鉛筆の持ち方や筆順についても、保育者は、遊びの中で正しい持ち方や正しい筆順を伝えるように心がけるが、すべてを把握するのは困難である。

そこで、文字に「自然な形で興味関心をもち」、「遊びを楽しみながら」覚える、ワークブックに頼らない方法を中心にワークショップを展開した。

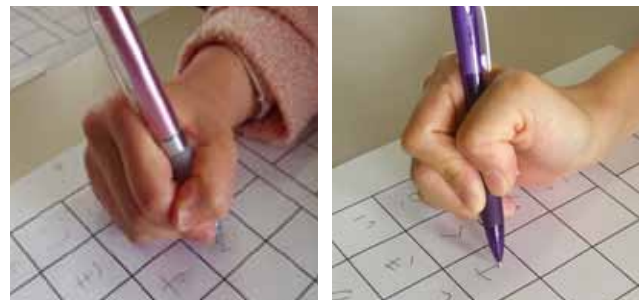
補足的な意味で、学生に見える鉛筆の持ち方や平仮名の筆順の問題点について話をした。

2. 学生の実態

(1) 鉛筆の持ち方

筆者の目視によって持ち方のタイプ分けをし、それぞれの全体に占める割合を算出した。また、持ち方と手先の器用さを一定時間内の「大豆運び」で実証しようと考えた。

調査時期は2014年4月28日、対象人数は幼児教育学科127人である。調査方法は割り箸を使って10センチ離れた箱まで大豆を移動させる作業で、30秒以内に移動させる大豆の数をみた。鉛筆の持ち方と箸の持ち方には、箸の手前に位置する一本の持ち方と鉛筆の持ち方との間にある程度の相関関係があると仮説を立ててこの実験をした。



結果、持ち方は、全体の4割が親指突出し型で、正しい持ち方は2割以下であった。大豆の個数は、鉛筆を正しく持つグループが一番多く、つかみ持ち・握り持ち・つまみ持ちのグループは一番少なかった。また、親指突き出し型やつかみ持ちのグループには、30秒間に3個など極端に少ない例もある。

	人数	割合	平均個数	最低・最高
① 親指突き出し型	54	42.5%	9.94	3～16
② つかみ持ち、にぎり持ち、つまみ持ち	25	19.7%	9.60	4～15
③ 人差し指そらし型	25	19.7%	10.12	6～14
④ 正しい持ち方	23	18.1%	11.09	7～16
合 計	127			

(2) 平仮名の筆順

短大生の平仮名の筆順を2回にわたって調査し、2012年生から2014年生について分析した。第1回は、対象258人(本学幼児教育学科学生2012年生及び2013年生)、調査時期は2013年9月25～30日である。50音図に筆順を示

す数字を書き込む方法で行った。第2回も方法は同様で、対象人数は128人(2014年生)、2014年4月18日、24日の両日に調査した。結果は以下である。

筆順間違いが一字も無く、すべてを正しく書く学生は、第1回(2012年生及び2013年生)で3割弱、第2回(2014年生)で4割弱であった。いずれにしても高くはない。

筆順誤りは「も」が多く、2回の調査を通して、全体の5割、短大生2人に1人は正しくない。続いて、「や」「せ」「ら」「よ」等の誤りが多い。

第1回

《誤り数》	全体の
誤答無し…67人(26.0%)	
1つ誤り…91人(35.3%)	
2つ誤り…60人(23.3%)	
3つ誤り…19人(7.4%)	

《誤り文字》	全体の
① も…132人(51.2%)	
② や… 44人(17.1%)	
③ よ… 37人(14.3%)	
④ ゆ… 28人(10.9%)	
⑤ な… 24人(9.3%)	
⑥ ら… 20人(7.8%)	
⑦ せ… 13人(5.0%)	
⑧ か… 8人(3.1%)	

第2回

《誤り数》	全体の
誤答無し…47人(36.7%)	
1つ誤り…47人(36.7%)	
2つ誤り…23人(17.9%)	
3つ誤り… 8人(6.3%)	
4つ誤り… 1人(0.8%)	

《誤り文字》	全体の
① も……………60人(46.9%)	
② や、よ…各24人(各18.8%)	
③ せ、ら…各7人(各5.5%)	
④ き、さ、ほ、ま、を…各1人(各0.8%)	

3. 学生の矯正

(1) 鉛筆の持ち方

正しい鉛筆の持ち方の手順(以下①～③)を筆者なりに考えた。

- ① 右手親指のはらを人差し指の第一関節側面につけると、アルファベットの「D」のようになる。
- ② 指のつなぎ目に鉛筆をはさみ、中指の第一関節側面を鉛筆の枕のようにして、鉛筆を安定させる。芯の先から見ると、ちょうど鉛筆胴体を親指、人差し指、中指の三点で支えるのが分かる。薬指と小指は軽く添える。
- ③ 手全体に力を入れすぎず、手のひらと指の間に小さなゆで卵でも含むような丸い形を保つ(風が通る、丸

い空間ができるようにする)。

現在、鉛筆製造販売会社と学習雑誌との協力で、従来の六角形とは異なる三角形の鉛筆が商品化され、もち方練習用に使用されている。「親指・人差し指・中指」で三角鉛筆の側面を支える感覚を覚え、習慣化するのに有効である。

(2) 平仮名の筆順

①誤りやすい文字「も」は、横二画を先に書く傾向がある。「き」「は」「ま」のように横の二画を先に書く例と混同されるためであろう。

②「ら」「よ」「な」は、数字の「5」のように大きな部分を先に書く傾向がある。「ら」は「良」、「よ」は「与」、「な」は「奈」が元字であるから、小さな点を先に書くのが正しい。その他、1972年の調査(『幼児の読み書き能力』国立国語研究所)によると、「け」「に」「は」「ほ」などを、右の部分から書く誤りが多いという。ライオンを描く子どもがたてがみから描くように「特徴的な部分を先に描く」傾向が文字にも発揮されると仮定するならば、「ら」「よ」「な」の大きい部分から書く例、「け」「に」「は」「ほ」を右側から書く例も、特徴的な部分から書いていることで説明がつくが、正しい書き順ではない。

③「せ」「や」は、最初に書いた横画に、長い縦画を交わらせ、後で短い縦画を足す誤りが見られる。

以上の調査で、学生が誤りやすい文字をリストアップできたので、それらを中心に学び直しをするように指導したい。

4. 幼児教育の課題

(1) 鉛筆を持つ前の準備

幼児教育では、鉛筆を持つ機会が少ない。だが、小学校に入って初めて鉛筆を持たせるのでは、むしろ不自然な段差を助長するのではないだろうか。

では、逆に、幼児教育が小学校を先取りして鉛筆を早く持たせればよいのかというと、鉛筆で書くには、指先や手首、肩、腕の運動機能の発達、適度な筆圧の調整などが必要で、それら基礎力を養うことの方が先決である。そのために「指遊び、手遊び、おはじき、切り紙、折り

紙」等で手指の巧緻性を高めること、「ほうき、バトン、縄跳び」などで手首の機能を高めること、「砂遊び、雲梯」などで肩や腕の力をつけること、「くれよん、色鉛筆、絵具筆の持ち方に慣れ、筆圧を調整しながら自由に線を引くこと等が幼児教育に求められる内容であろう。一色八郎の「線遊び」(『幼児の手の発達と文字の指導』黎明書房、1985年)は非常に興味深いものである。

園や小学校で三角鉛筆や矯正用の器具を使うところもあるが、使う時期について検討の余地があると考えている。

(2) 平仮名の読み書きの準備

音節分解ができること(たとえば「い・ぬ」「う・さ・ぎ」「ら・い・お・ん」等)、上下左右が認識できることも文字の読み書きを構成する力である。そのため、「○で始まる言葉集め」「しりとる」「ねことねずみ」「猛獣狩りに行こうよ」等の遊びで音節分解に馴れ、運動会の行進やダンスなどで「右・左」と掛け声を掛け、ボールを「上から・下から」投げたり転がしたりすること、「福笑い」で上下左右を伝えること等も、遊びを通して読み書きの準備性を高めていることになる。「買い物ごっこ」「郵便屋さんごっこ」の遊びを通して興味関心を高める例は多いが、図画の氏名書きや帰りの会の連絡帳配りを文字に触れる大切な過程にしている園が少なくない。

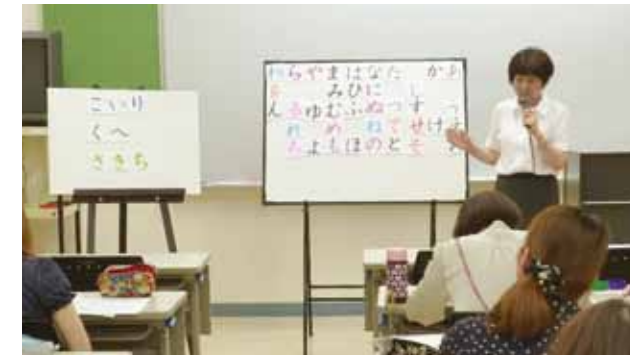
そして、子どもが自然に文字を書いても、保育者側に読み誤り、書き誤りしやすい文字のリストアップができていれば、心に余裕が生まれるのではないだろうか。古い研究ではあるが国立国語研究所1972年の調査『幼児の読み書き能力』で、読み誤り、書き誤りの多い文字が明らかである。形が似た文字同士(「ね、れ、わ」など)、音が似通う文字同士(「ぬ、ね」など)は誤り易い傾向にある。

5. 文字遊びの提案

(1) 線遊び

一色八郎の線遊び「鉛筆のピクニック」の自由自在に鉛筆で線引きをする活動は、字を書く以前の基礎力養成に欠かせないものであろう。小学校教諭から、就学後極端に筆圧の弱い児童がいるとの指摘がある。初めから小

さくきれいに書くのではなく、存分に大きく自由自在に線を引いて、肩や腕、手指の動きを高めておくことが大事である。



(2) パネルシアター「平仮名いろいろぺったんこ」

先行研究からヒントを得て筆者が考案した、パネルシアター文字板を紹介した。幼児教育では、字形の面白さに気付き、自然と読めるようになり、書こうとする気持ちを高める。小学校1年生では、誤りやすい筆順に注意し、平仮名を組み合わせて言葉を作る活動などに使える。字を覚えるには、50音通りでなく、画数が少ないものから覚える、似ている字を比べながらセットにして覚えるなど柔軟に捉えると面白くなる。一色八郎が「アイ式」と称して独自の平仮名順を提唱していることにも通じる。

このパネルシアターを保育室に常設し、子どもが自由に扱える環境を整えておくことが、文字に関する興味関心を全体的に高め、個人差の幅を緩和し、全く興味を示さない子どもを減らすことにつながると考えている。



(3) 平仮名ビンゴ

番号の代わりに平仮名を書き込んだカードを配布し、保育者が示す文字と同じ文字がカード上に見つければ、その文字に○印を付ける。○が縦横斜めに並べば「ビンゴ」と叫び、勝ちとなる。

「画数が少ない字」シートや「間違えやすい字」シートなどを用意しておくことで、難易度を調整できる。小学校では、シートに子ども自身が書き込む方法で遊べる。

(4) 筆順国盗りゲーム

二人組になり、真ん中に紙を一枚置く。一人は青色の筆記具、一人は赤色の筆記具を持つ。二人でジャンケンをして勝ち負けを決める。保育者が任意に平仮名の一画分を書くのを見て、ジャンケンで勝った子どもが紙の上に同じように書く。再びジャンケンで勝ち負けを決める。保育者は先の一画目に二画目を書き足す。今回、勝った子どもは保育者が書く二画目を真似て同じように紙の上に書く。そのように、一画ずつ勝った子どもが書いていき、字が完成したところで、たくさんの画数を書けた子どもが、文字を書いた紙を獲得する。引き分けの場合には、文字の紙は誰のものでもない。また別の紙を用意して、別の字を書いていく。

文字に「自然な形で興味関心をもち」、「遊びを楽しみながら」触れる遊びを、小学校や周囲の園との情報交換によって集め深めていくことが、子どもの育ちの連続性を見据えた保幼小連携となり得るだろう。

保育者ワークショップ

身近な素材でおもちゃをつくろう

仁愛女子短期大学 講師 香月 拓

◆ 講座要項掲載内容 ◆

子どもは自由に遊ぶ発想力と行動力が備わっている、いわば遊びのスペシャリストです。そのため、身のまわりにあるものなら何でも遊び道具にしてしまいます。そのような身近にある素材を使っておもちゃをつくることができたら、子どもの遊ぶ力をさらに引き出すことが出来るのではないのでしょうか。そこで今回は、身近にある素材で簡単にできるおもちゃを作って遊んでみようと思います。参加者の皆さん自身が手を動かして、遊びの楽しさを実感してください。

※牛乳パック（切り開いていない1000mlのもの）、ペットボトル（500ml）を各自で持参してください。

◆ 開催期日 ◆

平成26年11月1日（土）13:30~15:00



◆ 開催内容 ◆

1. はじめに

子どもにとって遊びとは「生活そのもの」であり、とても重要です。子どもたちは自由に遊ぶことを通して多くのことを学んでいきます。そして、その遊びをサポートするものの一つにおもちゃがあります。

今でこそ、世間には多種多様なおもちゃが溢れていますが、もともとおもちゃとは買うものではなく作るものでし

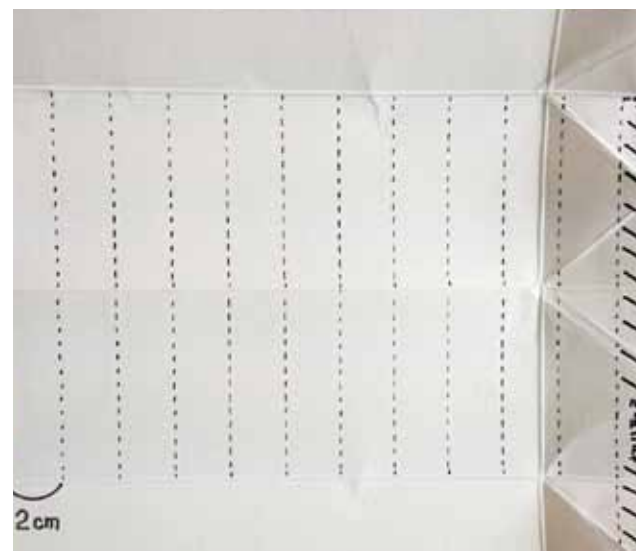
た。そして、子どもたちは新聞紙や牛乳パック、人間の体など身近にある素材だったら何でもおもちゃにしてしまいます。そんな時、私たち大人が身近にある素材にアレンジを加えておもちゃを作ることができれば、子どもたちの遊びはより豊かに展開していきます。そこで、今回のワークショップでは、牛乳パックと500mlのペットボトルを使って簡単にできるおもちゃを作りました。

2. 工作「牛乳パックのフリスビー」

最初に「牛乳パックのフリスビー」を作りました。直線でできている四角い牛乳パックから、円形のフリスビーができるのも手作りおもちゃならではの面白さではないでしょうか。

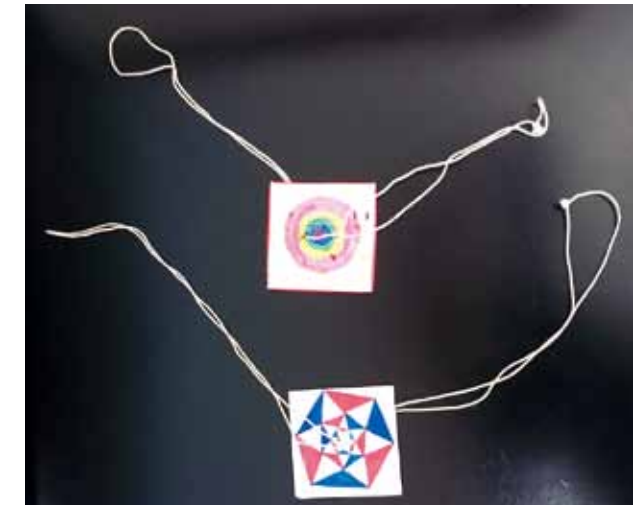
工作過程は以下の通りです。

- ①牛乳パックを平たく開いて11本の切りこみを入れる。
- ②マジックで柄を描く。
- ③半分に折って、ハサミで切る。
- ④輪にして、両面テープでとめる。



3. ブンブンごま

2つ目のおもちゃとして、牛乳パックの底の部分を使い、ブンブンごまを作りました。底の部分に絵を描いた後、2ヶ所穴を開けてたこ糸を通すだけの簡単なものですが、その名のとおり、回すとブンブンと音が鳴って繰り返し遊べるおもちゃです。



4. 牛乳パックのリース

最初に作ったフリスビーは外で思い切り投げて遊ぶおもちゃですが、そこにひと工夫加えるだけで、全く違ったおもちゃ「リース」にもなります。リースとは、花や葉、木の枝などを編んで作った輪飾りのことで、牛乳パックのフリスビーとペットボトルを使います。牛乳パックとペットボトルという性質も特徴も違う2つの素材を同時に使って、1つのおもちゃを作るということも身近な素材を使っておもちゃを作る楽しさといえます。

工作過程は以下の通りです。

- ①牛乳パックフリスビーの真ん中の輪の部分に500mlペットボトルの底を切ってはめる。
- ②ペットボトルを両面テープで固定する。
- ③ペットボトルのキャップやモールなどで飾り付けをして完成。



5. おわりに

今回のワークショップは、参加人数がそれほど多くなかったのですが、お互いに教え合いながら和やかな雰囲気が進めることができました。このように、身近な素材でおもちゃを作って遊ぶことでコミュニケーションが生まれるのも、おもちゃ作りによる楽しさの一つだといえます。また、手作りおもちゃは壊れてもすぐに作りなおすことができるので、大胆に遊ぶことができます。そして、子どもと一緒に作るおもちゃやアレンジを加えることで違った遊びができるおもちゃなど、手作りおもちゃにはたくさんの面白さがあります。このような特性を知ること、さらに子どもたちの遊びが広がるような支援をしていけるのではないのでしょうか。

当日ご参加いただいた方々からは「おもちゃだけでなく、ひと工夫でクリスマスリースに変わること驚いた」や「簡単にできるものばかりだったので、園でも早速やってみたい」など、色々な意見を頂戴いたしました。今後もこのような機会がありましたら、保育の現場に取り入れられるような手作りおもちゃを紹介していきたいと思います。

新人保育者スキルアップ講座

仁愛女子短期大学 幼児教育学科

本学幼児教育学科の卒業生の多くは、幼稚園や保育所などで、幼児教育・保育に携わっています。学生とは異なり、責任が伴う現場の保育者として、喜びや楽しみと共に、戸惑いや葛藤も感じていることでしょう。当センターでは、そのような卒業生が新人保育者としてさらに力を発揮していけるように、保育実践能力の向上と同期生との情報交換を目的として、毎年夏に、前年度の卒業生を対象としたスキルアップ講座を開催しています。今回も、平成26年3月に卒業した新人保育者39名が参加しました。



【クラス別分科会】

2年間を共にしたクラスの仲間、在学時にクラスアドバイザーだった先生やお世話になった先生と、お互いの近況を報告し合いました。仲間の大切さやありがたさを痛感した方が多く、「みんなそれぞれ大変だと思い、自分も頑張ろうと思った。」「色々な話が聞けて心が和んだ。みんな一緒にいることを思っていることがわかり、同期を大事にしたいと改めて思った。」などの感想がありました。



(文責：青井夕貴)

日時	平成26年7月27日(日) 13:00~16:00
場所	仁愛女子短期大学
内容	①実技講習 テーマ:「新聞ボールで遊ぼう!」 講師:出村 友寛(本学教員) ②クラス別分科会 テーマ:「友人と語ろう」 担当:本学教員

【実技講習】

今回は、本学の専任講師で、幼児教育学科の学生に体育を教えてくださっている出村友寛先生から、現場でもよく活用されている「新聞ボール」を使った運動あそびについて実践しながら学びました。さまざまな遊び方だけではなく、ボールの大きさや重さなどを子どもの発達や活動の目的に合わせていく必要性や「投げる」動作の意味など根拠や理論的な背景についても、教えていただきました。

終了後は、「新聞ボールの良いところ、悪いところを踏まえて、遊び方を考えることができた。」「投げる遊びをすることが少ないので、今後意識していこうと思った。」などの声が参加者から聞こえてきました。

幼教フォローアップ講座

仁愛女子短期大学 幼児教育学科

本学幼児教育学科を卒業して4~6年目の保育者を対象とし、保育のスキルアップ及び卒業生のネットワークづくりを目指して、今年度はじめて「幼教フォローアップ講座」を開催いたしました。卒業からこれまでの自分自身の経験を振り返り、今後さらなる保育の質の向上に向けて意欲を高めるための講座や、同期生に限らず卒業生同士や本学教員との情報交換会を実施しました。今回は、卒業して4年目が4名、5年目が1名、6年目が7名の計12名の参加となりました。



終了後、参加者からは、「日々の保育において、子どもたちを急かしたり、「こうしてほしい」と求めすぎたりしていると反省する機会になりました。」「後悔する経験の大切さ、本当に待てないのは大人ではないか、という話を聞いて、改めて自分の保育を見直すきっかけになりました。」「講義の内容はわかりやすく、参加者同士の質問タイムがあり、他者の意見を聞けて良かったです。」などのような感想がありました。

日時	平成27年2月22日(日) 13:00~15:30
場所	仁愛女子短期大学
内容	①講習 テーマ:「気になる子への対応 ー 脳と行動・発達」 講師:乙部 貴幸(本学教員) ②情報交換会

講習では、本学の准教授で、幼児教育学科の学生に心理学を教えてくださっている乙部貴幸先生から、近年では現場でも注目されている「気になる子への対応」についてお話をいただきました。子どもの多動性や衝動性について、心理学・脳科学の視点から捉え、その視点を基にかかわり方を探っていくことも、子どもの特性に沿った支援や偏らない支援につながると教えていただきました。

情報交換会では、本学教員6名も加わり、お互いの近況を報告し合いました。参加者からは、結婚や引越しの報告、保育・教育での課題や葛藤などが話され、本学教員からは、新しい教員の紹介や保育への助言等がありました。



今回は12名とかなり少人数の参加となりましたが、参加者のみなさんには「また開催してください!」という声をたくさんいただきました。来年度以降もこの取り組みを継続し、徐々に参加人数を増やしながら、幼児教育学科卒業生同士や卒業生と本学とのつながりを深めていきたいと考えています。

(文責：青井夕貴)

iPad基礎講座・Microsoft Excel講座

仁愛女子短期大学 情報メディア教育支援室

(1) 活動方針

情報メディア教育支援室では福井ライフ・アカデミーと連携し、本学の夏休み期間中に情報系の講座を開講しています(例年9月初旬)。この講座は、本学の学生や教職員に加えて一般の方も対象です。この講座では、一般の方にもソフトウェアや情報機器についての用途・使い方を知ってもらい、それらを仕事や日常生活の中で有効に活用してもらうことが目的です。

昨年度は、表計算ソフト「Excel」の初心者向け講座と、タブレット「iPad」の初心者向け講座を行いました。本年度も同様のテーマ、内容で開講しました。

(2) 取り組みと成果

Excel講座を2014年9月6日(土)に、iPad基礎講座を同年9月7日(日)に行いました。時間は両日とも9:00～16:00で、それぞれ参加者は10名と5名でした。いずれも一般の方です。

Excel講座は、Excelの基礎から学んでもらい、家計簿など普段の生活の中でExcelを活用してもらうことが目的です。データの入力方法、数式・関数の入力方法、書式の変更方法、グラフの書き方といった、Excel操作の一連の流れについて説明を行いました。受講者の方には実際に



図1: 9/6(土) Excel講座の様子

iPad基礎講座は、iPadでどのようなことができるのか知ってもらい、今後の活用や購入の参考にってもらうことが目的です。iPadの基本的な操作方法、時計、カメラ、マップといった基本的なアプリの使用方法を学びました。そ

の上でアプリ・音楽等の購入方法、経路検索や料理レシピ、ネットラジオなど、普段の生活の中で便利に利用できる



図2: 9/7(日) iPad基礎講座の様子

るアプリの紹介を行いました。こちらも受講者の方には実際にiPadを操作してもらいながら講座を進めました。

(3) まとめと今後の課題

Excel講座は昨年度よりも4名ほど増えました。講座後のアンケート結果では、今年度も好評を得ることができました。両講座とも昨年度と同じ内容であり、基礎的ではありましたが、受講者の方に意図した内容が伝わり、それぞれ基本的な使い方を理解していただくことができたと思います。昨年度は参加者の増加を目標にしましたが、Excel講座がわずかに増えたのみとなりました。しかしながら、その分、個別のフォローが充実し、参加者の方にはご満足いただけたかと思います。

今後検討すべき内容としては、まず、講座のテーマが挙げられます。ExcelとiPad以外のテーマも検討していきたいと思います。次に、講座の開催方法が挙げられます。

両講座とも一日のみであったため、都合が付かない方もいらっしまったと思われます。そのため、同じ内容の講座を何回か開催することで参加の延べ人数が増えると思われます。また、講座の難易度も検討する必要があると思われます。今年度はExcel、iPadとも初心者向けの講座を開催しましたが、中級者や上級者向けの講座も開催することでより幅広い方に参加いただけたと思われます。

以上のように、今後は昨年度も目標とした講座の周知の充実を図るとともに、講座のテーマ、開催時期、回数、内容などを検討していき、さらに参加者の方に満足していただける講座にしていきたいと思います。

(文責: 平塚紘一郎)

地域連携

地域連携開放講座

仁愛女子短期大学 教授 内山 秀樹

もりたエコキャンドル 2014

ことしで3回目を迎える森田地区のエコキャンドル。今年も企画段階から本番まで、生活環境専攻1、2回生の学生が、さらに卒業生までもが参加。1回生は「地域環境論」の授業の一環として、原画への応募、当日のスタッフとして参加し、環境デザイン研究室の2回生は準備段階の実行委員会などにも参加。

デザイン画は、生活環境専攻1回生の松原沙霧さんが見事最優秀賞を獲得。タイトルは『flow』で、森田のシンボル九頭竜川を大きな龍に見立て、そこに集まるサクラマスを描き、川を身近に感じるまちづくりを進めていってほ

しいという願いを込めてデザインした、との事です。他に本学からは、生活環境1回生の西端彩花さんと水野倫菜さんが優秀賞に入賞。

7月26日、会場の九頭竜川河川敷では地区の人口と同じ約1万2千個のキャンドルで、勇壮な龍の姿が浮かび上がり、見る人に感動を届けました。

うれしい出来事は、今年から本学卒業生が地元の若者団体“PRもりた”に参加し、このエコキャンドルの実行委員としてポスターのデザインや企画準備に参画するようになった事で、在学生も含めて来年も積極的に参加したいものです。



卒業生も実行委員として参加(右中)



表彰式でインタビュー(松原さん)



闇夜にうかび上がった勇壮な龍の姿

もりた夢駅～夏物語～

【JR森田駅駐輪場ペイントプロジェクト】

美しいまちづくり、活力あるまちづくり、地域の課題を解決するまちづくりについて学ぶ「地域環境論」の授業の一環として、地元森田地区の駅を中心に歩いて暮らせるまちづくりに6年前から参加してきました。駅を住民にとって身近な存在にするための取り組みの一つとして、森田地区文化委員会が5年前より「もりた夢駅～夏物語」を開催するにあたり、生活環境専攻1回生が企画、実行に参加しました。

今年は、学生が6つのグループに分かれ、住民や子供達に駅に関心を持っていただく企画と駐輪場壁画のデザインを提案しました。企画については、各グループで1つに絞った結果、「もりたん電車」、「マイもりたんをつくろう」など6つの企画が提案され、準備しました。

しかし、予定していた7月13日（日）は荒天のためやむなく7月15日に延期し、地域環境論の授業時間90分間で壁画のペイントを完成させることになりました。その結果、残念ながら準備した企画は中止となりました。壁画のペイント作業には約40人の学生と森田地区文化委員会の委員、公民館関係者あわせて約50人が汗を流しました。壁画デザインは、原案を学生が6グループに分かれて考えた6案から、森田地区文化委員会で『森田の四季』に決定しました。それを地元森田在住で、かの有名なEXILEの靴のペインティングも手がけているという若手アーティスト内田徹（THIRTEEN）さんがリライト。授業の中でもステンシル等の準備を行ったり、文化委員の方々が事前に壁画への下絵の転写などの準備をしていただい



FCTVのインタビュー

たおかげで、短時間で完了しました。また、地元の親子も前もってステンシルの手法で森田の様々な動植物を描きました。

当初、地元からは、学生提案の壁画デザインについて慎重意見もあると聞きましたが、完成してみると、森田を代表する風景が一望できて好評とのこと。来年の夏、残りの半分の秋と冬について学生から原画を募集し、完成するのが楽しみです。



いい汗かいたあとの記念写真



完成した駐輪場壁画「森田の四季」（春と夏編）

地 域 連 携

森田地区まちづくり協議会と 仁愛女子短期大学との連携事業報告

地域活動実践センター長 重村 幹夫

「森田地区まちづくり協議会と仁愛女子短期大学との連携に関する協定」が平成22年8月30日に締結されました。この協定に基づいて、平成26年度も相互に連携・協力して様々な事業を展開してきました。

1 森田・仁愛女子短期大学連携協議会

「第5回森田・仁愛女子短期大学連携協議会」が、平成26年6月6日、仁愛女子短期大学で開催されました。森田地区から安田寛自治会連合会会長他9名が、本学から禿正宣学長他6名が出席しました。



森田地区の出席者
（自治会連合会会長：安田寛、同副会長：田中利憲、同事務局長：松井敏数、社会福祉協議会会長：柳原健一、公民館館長：吉村公司、運営審議会委員長：横山芳樹、文化委員会委員長：高木荘治、同副委員長：勝見祐昌、森田公民館主事：吉田智子）



仁愛女子短大の出席者
（学長：禿正宣、副学長：水岸誠、学生部長：内山秀樹、事務長：吉川敏通、地域活動実践センター長：重村幹夫、事務：中村澄子）

協議事項は、平成25年度に実施した連携事業の報告及び平成26年度実施予定の連携事業について行いました。

2 公民館と地域活動実践センターの事務打合せ

事務レベル協議が、平成27年2月5日に仁愛女子短期大学で開催されました。森田地区からは吉村公司森田公民館館長、吉田智子公民館主事が、本学から重村幹夫地域活動実践センター長、内山秀樹教授、中村澄子センター事務が出席しました。打合せ内容は、平成26年度の振り返りと平成27年度実施予定の連携事業、夢ギャラリー森田の運用状況等について話し合われました。

3 もりた夢駅～夏物語2014～

本学生生活環境専攻「地域環境論（内山秀樹教授）」の一環として、7月15日に開催されました。今年は、森田駅駐輪場壁画を、地元アーティストとのコラボレーションによりペイントしました。

4 森田エコキャンドル2014

これも、「地域環境論（内山秀樹教授）」の一環として、7月26日に開催されました。今年は、環境専攻卒業生が、企画準備段階から参加しました。3及び4の二つの連携事業の詳細は「地域連携開放講座(p.23-24)の項をご覧ください。

5 森田地区文化祭と本学大学祭の連携・協力

森田地区文化祭が10月25日・26日、本学大学祭が10月18日に開催されました。今年は、日程が合いませんでした。書道サークルの作品展示、栄養研究サークルのパウンドケーキの販売が行われました。

6 もりた夢市への参加

「もりた夢市」は、森田地区住民主体の朝市として、

11月9日に開催されました。ここでも、栄養研究サークルのパウンドケーキの販売が行われました。

7 夢ギャラリー森田(JR森田駅)

地域の方にJR森田駅をもっと身近に感じてもらうため、駅舎内の一角に「夢ギャラリー森田」が開設されています。森田地区と本学で、一ヶ月交代で作品を展示しています。今年度は、サークルの他、本学全学科、専攻の展示を行いました。

①第24集『わたしのマスコットキャラクター』 (5月1日～5月23日)

出品者は、生活環境専攻8名です。今回の作品は自分をキャラクター化し、立体化した作品です。

②第25集『生活情報専攻 卒業研究 2014』 (7月1日～7月31日)

出品者は、生活情報専攻の 島田ゼミ・田中ゼミ・内藤ゼミ・野本ゼミ・大西ゼミ・平塚ゼミ・澤崎ゼミの学生です。ゼミの内容紹介を行いました。

③第26集『食物栄養専攻 栄養（食事）についてのパネル展』 (9月1日～9月30日)

出品者は、食物栄養専攻生です。「栄養（食事）」についてのパネルを作成しました。

④第27集『折り紙研究サークル 《春夏秋冬》壁画・色紙』 (10月1日～10月31日)

出品者は、折り紙研究サークル9名です。折り紙を使い季節の変化を壁画・色紙に表現しました。

⑤第28集『生活環境専攻 動物と植物を題材にした 文様デザイン・design news』 (1月9日～1月31日)

出品者は、生活環境生4名です。動物等を題材に、特徴を単純に意匠化し、連続する文様としてデザインを試みた作品です。また、1年間の取組みと活躍を掲載した、design newsを展示しました。

⑥第29集『幼児教育学科図画工作作品展』

出品者は幼児教育学科生です。紙版画と、一月の小壁画を展示しました。



『生活情報専攻 卒業研究 2014』



『食物栄養専攻 栄養（食事）についてのパネル展』



『折り紙研究サークル 《春夏秋冬》壁画・色紙』



『生活環境専攻 動物と植物を題材にした
文様デザイン・design news』

地 域 連 携

森田公民館における幼児向け英語教室

仁愛女子短期大学 講師 野本 尚美

<開催日時>

平成26年8月9日（土）10:30～11:20

（当初は翌日10日も開催予定でしたが、大型台風が接近したため中止としました。）

<開催内容>

今年度の新規事業として、森田公民館にて幼児向け英語教室を開催させていただきました。3～6歳のお子様10名とその保護者の方々にご参加いただき、本学生活科学学科生活情報専攻学生5名とともに、手遊びやゲーム、簡単な工作などを通して英語に親しんでいただきました。今回は特に「数」と「色」の英語を多く取り入れました。具体的な内容は以下の通りです。

1. 「数」の英語：手指を使いながらみんなでSeven Stepsを歌いました。（one～seven）
2. 「色」の英語：昆虫の絵を提示しながら色の英語について学びました。（red, blue, yellow, green, pinkなど）
3. 虫探しゲーム：私たちがあらかじめ部屋の中に隠しておいた虫の絵を子どもたちに探してもらい、見つかった虫の数をみんなで英語を使って数えました。
4. 釣竿を作ろう：一人ひとりの好きな色を（できれば英語で）言ってもらい、その色の画用紙と紐の先に磁石をつけて釣竿を作りました。
5. 虫釣りゲーム：クリップをつけた虫の絵を釣竿にくっつけて遊ぶゲームを2チームに分かれて行い、とれた虫の数をみんなで数えました。

子どもに英語を“教え込む”のではなく、子どもの自然な遊びの中に英語を“溶け込ませる”ことを目標として、上記の内容を構成しました。

当初の時間配分通りに進まず、終了予定時刻をオーバーしてしまいましたが、保護者の方々のご協力もあり、

私も最後まで楽しく講座をさせていただくことができました。終了後、保護者の方々からは「子どもの表情がイキイキしていたので参加してよかった」「参加型・体験型の講座だったので良かった」「身近なテーマで楽しかった」といったご感想をいただきました。

またお子様のサポート役として参加した学生たちの感想として「予定通りにはいかないこともあったが、子どもたちの笑顔を見て、頑張って準備をして良かったと思った」「お子様だけでなく、一緒に来てくださった保護者の方々とも積極的にコミュニケーションを取りながら進めていくことが重要だと感じた」などの意見が書かれており、地域の方々との交流の中で学生たちも大変多くのことを学ばせていただいたと思います。

今年度は残念ながら1日のみの講座となりましたが、今後も森田公民館のご協力を賜りながら、子どもたちが「英語って楽しい」と感じてくれるような講座を企画したいと思います。



多文化体験プログラム

仁短祭でのロッキーナ先生との交流と
ロッキーナ先生と「Englishであそぼう」講座仁愛女子短期大学 生活科学学科生活情報専攻 松川 葵・宮川 奈緒美
仁愛女子短期大学 講師 野本 尚美

私たちは、秋の仁短祭に、英語ネイティブスピーカーのロッキーナ先生を迎え、先生に仁短祭をご案内してまわりました。

ロッキーナ先生にお会いする前の私たちは、「英語なんて話せない!」ととても緊張していました。しかし、いざお会いしてみると、先生は英語が苦手な私たちにも分かりやすい簡単な英語で話しかけてくださり、私たちのつたない英語にも熱心に耳を傾けてくださいました。ロッキーナ先生との触れ合いのなかで、私たちは先生がとても気さくで優しい方であることを感じました。

先生と私たちは、前半の三十分間は模擬店などをまわり、後半の三十分間は茶道部のお茶会でお茶とお菓子をいただきました。模擬店をまわっている際、私たちのクラスメイトがメインステージにて競技をしているのを見て、ロッキーナ先生に「Those are my classmates!」と伝えると、先生は私たちと一緒に応援をしてくださいました。お茶の席では、今勉強していることや、自分たちの家族のこと、そして将来のことなど、たくさんのお話をさせていただきました。その中でいろいろなアドバイスもいただき、とても充実した時間となりました。

今回のロッキーナ先生との交流のなかで、私たちは貴重な経験をさせてもらい、それにともなった自信を身に付けることができたと感じています。最初は与えられた一時間がとても不安でした。一時間も英語でコミュニケーションをとることができるのだろうか、自分たちの案内で楽しいと感じてくださるのだろうか、と心配でした。しかし、先生にお会いしてすぐに、そんな心配は無用だったことが分かりました。長いと感じていた一時間はあっという間に過ぎてしまい、むしろ時間が足りないほどでした。最後にはありがとう、と先生がおっしゃってくださったので、私たちもとても満足した気持ちで別れることができました。今回の経験は、普段の教室での授業に加えて、さらにネイティブの方とも英語で会話ができるという自信と、もっと

話したい、そのために知識をもっとつけたい、という意欲に繋がったと感じます。



ロッキーナ先生との交流 (お茶会)



「Englishであそぼう」講座

平成26年度多文化体験プログラムの一環として、子ども向けのアトラクションを集めた「じんあいこどものくに」内で、ロッキーナ先生に「Englishであそぼう」講座をご担当いただきました。午前と午後の2回、30分間の講座の中で、英語を使ったゲームやリズム遊び、絵本の読み聞かせなどの多彩な活動を通して、お子様も保護者の方々も一緒に楽しんでいただくことができました。今後もこのような企画を通して、より多くの方々に異文化に対する理解や興味を深めていただければと思います。

福井市まちづくりセンター「ふく+」の活用

おもちゃサークルの「おもちゃであそぼう」

仁愛女子短期大学 講師 香月 拓

日時：1月17日(土)10:00～13:00
団体：仁愛女子短期大学 おもちゃサークル
内容：「おもちゃであそぼう」

本学のおもちゃサークルは、身近にある素材を使用したおもちゃ作りや市販のおもちゃで遊ぶという活動をしています。そのような活動をしていく中で、2014年度おもちゃサークルの集大成として、「おもちゃであそぼう」というイベントを「ふく+」にて開催しました。

このイベントは、「ふく+」内におもちゃで遊ぶスペースとおもちゃを手作りするスペースを設けて、子どもたちと学生たちが触れ合うことを目的としたものです。学生たちは秋頃からこのイベントに向けて、おもちゃ作りや壁面作りなど少しずつ準備を始めてきました。



おもちゃで遊ぶスペースには、市販のおもちゃだけでなく、紙コップ人形や箱カメラといった学生たちの手作りおもちゃもたくさん並びました。おもちゃを手作りするスペースでは、ブンブンごまと紙コップロケットを作れるように下準備をしたのですが、子どもたちには紙コップロケットが人気でした。

イベント当日はあいにくの雪模様でしたが、アオッサ子育て支援室の方々に協力していただき、なんとか開催することができました。しかし、宣伝が足りず来場者数が少なかったため、そこは改善していきたいと思っています。



遊びに来てくれた子どもたちはたくさんのおもちゃに囲まれて夢中で遊んでいました。



子どもたちは、自分のロケットに思い思いの絵を描いて飛ばしていました。

「ふく+」でイベントを開催することで、参加した学生たちは、自分たちで考えたアイデアを形にする楽しさや大変さを実感したのではないのでしょうか。さらに、「どのようなおもちゃに子どもたちは興味を持つのか」、「一緒におもちゃを工作する際にはどのような点に注意すればよいのか」などを考える良い機会になったと思います。そして何より子どもたちと関わることができて楽しそうでした。今後もこのようなイベントで「ふく+」を活用していきたいと思っています。

福井市まちづくりセンター「ふく+」の活用

まな種 18 with 仁短ゼミ発表

仁愛女子短期大学 教授 生活情報専攻 田中 洋一

仁愛女子短期大学生生活科学学科生活情報専攻で教える澤崎氏を中心として始めた「まなびの種プロジェクト（まな種）」では、自分がこれまで学んだことを5分間のプレゼンとして簡単に発表し、新しい学びの種を探します。1グループにつきプレゼンテーション5分+質疑応答5分で交代し、まな種1回で約10グループの発表&対話を行います。まな種には、私や本学卒業生が協力し、発表や質問以外にも受付や司会を担当しています。自治体職員や企業からの参加も多く、学生にとってはキャリア教育の場にもなっています。

2015年2月7日（土）13:30～15:30に福井市まちづくりセンター「ふく+」にて開催した「まな種18 with 仁短ゼミ発表」では、仁愛女子短期大学生生活科学学科生活情報専攻田中ゼミ4グループ（14名）及び澤崎ゼミ2グループ（5名）の学生が卒業研究の内容を発表し、一般の発表者は3名でした。

参加者は、先述したゼミ生19名、生活情報専攻で教える教員3名、田中ゼミの卒業生1名、仁愛大学の学生4名、仁愛大学の卒業生2名、福井県立大学の卒業生1名、福井工業高等専門学校卒業生2名、その他一般の方7名でした。ゼミ発表をコラボした「まな種」は初めてでしたが、若者の参加が多く、大変盛り上がりました。



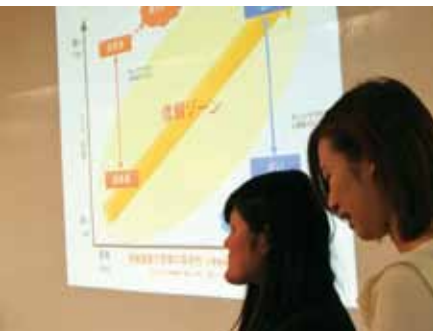
生活情報専攻の卒業研究・学外発表会自体も初めての試みでしたが、一般の方や他の大学生からの鋭い質問がとび、学生は多くのことを学ぶことができたようです。

【田中ゼミの発表タイトル】

- 笑顔になれる体験スポット『笑顔Map』の制作（こすもす組）
- かわいい動物とふれあえるトラベルガイドの制作（ちゅうりっぷ組）
- 池田町の魅力をつたえるHappyなメディア広報（すみれ組）
- 福井市市民憲章ソーシャルWebサイトの制作（ひまわり組）

【澤崎ゼミの発表タイトル】

- 実践から地域の活性化を考える（1）
－売れるお店の作り方～マーケティングの研究－
- 実践から地域の活性化を考える（2）
－売れるお店の作り方～実際に販売してみた結果の検証－



さいごに、澤崎ゼミの卒業研究は、『女子大生が考えた！シンプルな売れるお店の法則と地域活性化 女子大生が考えた！シンプルな売れるお店の法則と地域活性化—実践から地域活性化を考えた短大生の奮闘記』というタイトルの電子書籍で読めます。電子書籍化自体が地元の印刷会社とのコラボによる地域活性化策ですので、興味がある方はご覧ください。

AOSSA 子ども家庭センター・子育て支援室・相談室（平成26年度）

子ども家庭センター・子育て支援室・相談室 副室長 青井 利哉

アオッサの子ども家庭センター（以下、センター）は、児童福祉法第6条の2に準拠した地域子育て支援拠点事業を行うとともに、子ども相談等を行う相談室が併設されているセンターになります。子育て支援機能と相談機能が一体として大学機関に委託され、さらに行政との協働で深刻化する児童虐待対応を行うところは、全国を見渡してありません。センターは今年度で8年目を終えようとしています。当初センターに求められていた役割は、ここ数年で変化しており、たとえば、地域支援活動の充実です。これは地域の子育て親子へ、可能な限り支援が行き届くように、積極的に地域に出向く活動のことです。具体的には、①福井市中心部空き施設で子育て支援室の簡易版を再現し、子育て親子、子育て支援ボランティア、学生たちによる世代間交流を促進すること、②公立保育所へ訪問し、要支援家庭への援助方法を考えることです。

今回の報告は、センターの基本事業報告とともに、上記2点に関しても報告します。

1. 平成26年度子育て支援室の実績

1) 子育て支援室利用数、子育て講座開催状況の推移

表1は、平成24年度から平成26年度（3月12日まで）の子育て支援室の利用数の推移です。総延べ利用数は、子どもの利用延べ人数と、その保護者の利用延べ人数を合算したものです。表2は、子育て支援室におけるすべての子育て講座関連の開催数と延べ参加人数を表した表で

す。子育て講座の内容は、子どもの発育に関するもの、トイレットトレーニング、睡眠などの基本的生活習慣に関するもの、ベビーマッサージ、離乳食づくりなど、親子ふれあいに関するものなど、様々な内容で講座を開催しました。

表1. 子育て支援室の利用者数

	世帯数(世帯)	子どもの延べ利用数(人)	総延べ利用数(人)
H24年度	1,507	9,237	17,641
H25年度	1,456	9,708	18,558
H26年度	1,435	8,738	16,704

表2. 子育て講座の開催状況

	開催回数(回)	延べ参加人数(人)
H24年度	47	1,772
H25年度	71	3,084
H26年度	76	3,262

2) 子育て講座への参加率

表3は、子育て支援室の年間利用回数と、子育て講座参加率を集計したものです。集計に用いた利用者の実数は、1,962人です。子育て講座は外部講師に依頼したもののみを対象として、講座参加率を集計しました。結果的に、子育て講座への参加率は、子育て支援室の利用回数にかかわらず、ほとんど参加しない傾向があることが分かりました。この結果をもとに、講座の広報の仕方に課題がないか、内容に偏りがいないか等を再度見直し、講座の企画を行っていく予定です。

表 3. 子育て支援室年間利用回数と外部講師講座参加頻度の集計表

		外部講師講座参加頻度						合計
		すべて参加	よく参加	半分は参加	あまり参加しない	ほとんど参加しない	一度も参加しない	
子育て支援室 年間利用回数	5回以下(人)	57	1	55	29	13	1345	1500
	割合(%)	3.8	0.1	3.7	1.9	0.9	89.7	100.0
	6～10回以下(人)	0	3	7	11	96	134	251
	割合(%)	0.0	1.2	2.8	4.4	38.2	53.4	100.0
	11～50回以下(人)	0	0	2	5	56	131	194
	割合(%)	0.0	0.0	1.0	2.6	28.9	67.5	100.0
	51回以上(人)	0	0	0	0	9	8	17
	割合(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	52.9	47.1	100.0
合計(人)		57	4	64	45	174	1618	1962

表4. 相談室の相談実績件数 単位(件)

	子ども相談	女性相談	ママダイヤル	小 計	専門相談計	(小児科)	(弁護士)	総合計
H24年度	997	1,040	786	2,823	197	(129)	(68)	3,020
H25年度	813	610	611	2,034	187	(115)	(72)	2,221
H26年度	662	623	670	1,955	197	(131)	(66)	2,152

2. 平成26年度相談室の実績

1) 相談室利用実績

表4は、平成24年度から平成26年度（3月12日まで）の相談室利用実績の推移です。利用実績数はすべて延べ件数で表しています。表中のカッコ内は、専門相談合計における内訳を示してあります。

2) 公立保育所出張訪問相談の実績

相談室では、日頃の保育や支援によっても改善等が認められず、対応に苦慮している事例（家庭支援ケース）について、保育者へ助言することを目的として、試行的に公立保育所へ出張相談を行っています。今年度は、福井市子ども福祉課と子育て支援室の協力を得ながら、5か園、7事例に対応しました。対応事例の多くが、養育者の精神状態の不安定さに関連して、子どもの行動上の問題

にあらわれていました。福井市から次年度も継続の必要性が認められ、地域の保育所へ相談室の専門性を提供していくこととなりました。

3. 地域支援活動

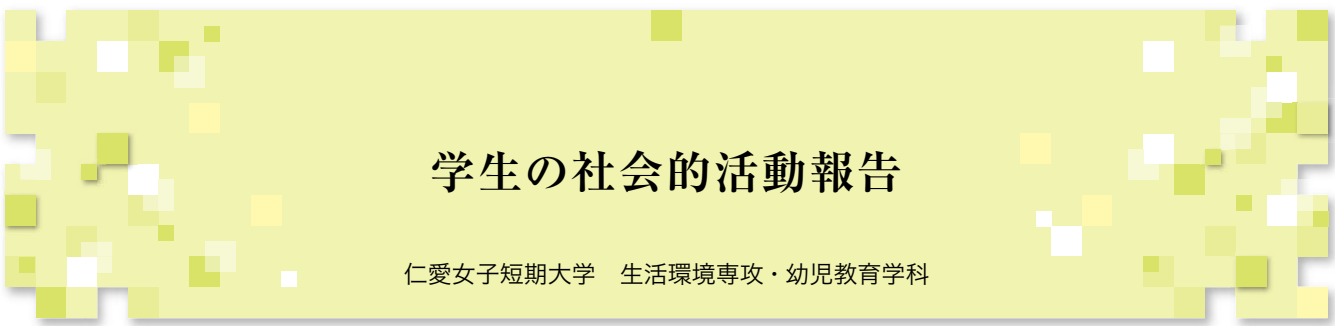
今年度は、仁愛女子短期大学地域活動実践センター、福井市と協働して、学生によるオレンジリボン活動（児童虐待防止啓発運動）を開催するとともに、福井市の街中にある「ふく+」という場所で、子育て支援室の再現を行いました。学生には、オレンジリボン運動の勉強会のため、公立保育所統括園長、福井市役所職員による講義を事前に行いました。そこで学んだ内容を、ポスターにまとめ、子育て親子の目に留まるように「ふく+」内に掲示しました。



事前学修（講師：公立保育園統括園長、福井市役所職員）

学生、福井市によるオレンジリボン運動（福井市中心市街地 西武前にて）

子育て親子、学生、地域の人 世代間交流（福井市中心市街地 「ふく+」にて）



学生の社会的活動報告

仁愛女子短期大学 生活環境専攻・幼児教育学科

フクイ夢アート 2014

【りめんばる〜ん】

生活環境専攻 2回生 大田 磨柚

【JSDハロウィンパーティー】

生活環境専攻 2回生 前田 恭伽

毎年テーマに合わせて仮装をして駅前を歩き回り、用意したお菓子を配るイベントです。今年は「ゾンビモンスター」ということでグロテスクなメイクや服装に変身した環境生が多く、駅前がまるでゾンビたちに支配されたかのようでした。お菓子をあげる場面では、子供がおもわず泣き出してしまうくらいで、私たちはもちろんでしたが、駅前にいた方も小さなエンターテインメントとして楽しんで頂けたのではないかと思います。私は今年で二回目のハロウィンパレードでしたが、年々仮装のクオリティーがあがっていると思います。これはイベントに力を入れる環境生の意気込みが表れているのではないのでしょうか。私たちの仮装を見て「怖い!」「すごい!」「そのメイクどうやっているのですか?」などと声をかけてくれる方がいて話をする機会が多かったです。見ている方にも楽しんで頂き、会話のきっかけになることがこのイベントの醍醐味なのではないかと感じました。このように、人と人とが繋がるようなイベントが駅前に増えることで、活性化に繋がっていくと思います。ハロウィンパーティーは私が卒業してからも後輩達によってより盛り上げていって欲しいです。



図 1 ガレリアにて

このプロジェクトは参加型のもので、ピンクの風船に「自分が大切にしている記念日・誕生日」などを書き込んでもらい、仁短環境生と大切な日を共有し繋がろうというものです。共有することで中々触れ合うことができない一般の方と仁短との繋がりをつくり、もっともっと仁短のこと生活環境専攻のことを知って頂くため夢アートに参加しています。風船には好きなことを書いていただけるので、小さなお子様からご年配の方まで幅広い層の方に参加していただくことができました。印象的だったのは、ご年配の方で、誕生日と思われる数字を書いていらっしやだったので、「お誕生日ですか?」とお聞きすると「はい、孫の誕生日なんです。何を書こうか考えたら、一番に思い浮かんだのが孫の顔でした。」と嬉しそうな笑顔で答えてくださいました。このように、自分の記念日や誕生日を書くのではなく自分の大切にしている人、大切に思っている人の誕生日などを書いてくださる方もいらっしやいました。自分のことを考える前に大切な人のことを想い書いてくださる方を見て、胸が熱くなりました。相手のことを想っていらっしやる方々の表情はとても柔らかく、とても良い表情でした。想われている方はとても幸せなんだなと心が暖まりました。このプロジェクトを通し学んだことは沢山あり、地域の人々と大切な思い出をこの夢アートで共有できたことを嬉しく思い、私たちにとっても良い経験になり来年にも引き継いでいってほしいと思いました。



図 1 りめんばる〜んに参加している子供たち

【Day*J】

生活環境専攻 2回生 上野 万弥

「Day*J」とは私たち生活環境専攻の学生が企画したフクイ夢アートでの催しの一つです。一般の人が、「りめんばる〜ん」を持って、Jのポーズをいすの上でとり、チェキで写真をとって、それに自分の大切な日を書いてデコレーションしてもらい、壁に貼っていってもらいます。

壁はマスキングテープなどで仁愛女子短期大学生が月ごとにデコレーションしており、そこに写真を貼っていく作業はとても楽しいものだと思います。自分の誕生日を書いて貼る人が多く、大人から子どもまで様々な方に参加していただけて壁がにぎわいました。友達にも参加してもらいたいと、後日お友達を連れてイベント会場に来てくださった方もいてとても嬉しかったです。

企画名の「Day*J」は私が考えました。企画内容は、すでに決まっていたどんな名前にしようかと考えたとき、そのとき頭の中で流れた音楽が名前の由来です。流れた曲は大ヒットディズニー映画「アナと雪の女王」のエンディングテーマ「ありのまま」です。映画の途中の歌は「松たか子」さんが歌っていますが、エンディングは「May J.」さんが歌っています。頭の中で写真に書く「日付」という字と仁愛女子短期大学の「J」、被写体の「自分」という字が浮かんでいたので、それらを組み合わせて、「May J.」さんの名前の発音に近い「Day*J」という名前を作りあげました。「May J.」さんの名前に近いことだけあってゴロがいいです。

最終日には、壁は写真で賑わい、たくさんの人の笑顔が並びました。たくさんの人が参加して完成する「Day*J」というアートは完成しました。カラフルでとても可愛いポップな作品になりました。

この企画で私は、たくさんの人がかかわって一つの作品を作り上げる素晴らしさを学びました。



図1 Day*j 8月と9月と10月

【図録ワークショップ】

生活環境専攻 2回生 堀元 葉月

期間中、夢アート会場のあちこちを巡って様々なアートイベントを記録して期間終了後に図録として一冊の冊子にしました。夢アートの期間中に開催されているたくさんアートイベントを記録することはとても大変でした。あちこち移動するアートイベントの開催場所を探したり、一日限定のアートイベントに参加したり、と楽ではなかったように思います。しかし、どのアートイベントもとても興味深く、面白いものだったので勉強にもなったし記録するのも楽しかったです。

期間終了後に記録したものを図録に編集した時、改めて自分たちはまだまだ学ぶことがたくさんある身なのだと実感しました。自分たちで記録した写真を仕分けるのも一苦労で、冊子のページを作るのは写真を仕分けるよりもっと大変でした。作業を重ねていくうちに綺麗に出来上がっていく冊子を見て達成感を感じる一方で、卒業後の自分のことを考えさせられました。私は卒業後、印刷関係の仕事に就くことになっています。今回編集をしてみてもうまいかなと思うときに、毎回こういう編集をしているプロってすごいんだなと思いました。それと同時に自分はまだまだなんだなと思うずにいられませんでした。卒業後に不安を感じました。しかし、うまいかなかったところもできなかったところも今、まだ学生のうちにわかってよかったとすごく思いました。

多くのことを学ぶいい経験になりました。



図1 作品を記録している様子

春江中部の新広報誌「わ!ちゅうぶ」のロゴマークをデザインしました。

生活環境専攻 2回生 竹澤 栞

私は春江中部地区の新広報誌「わ!ちゅうぶ」のロゴマークをデザインしました。「わ!ちゅうぶ」とは市民協働のまちづくりに取り組んでいる「春江中部まちづくり協議会」と「春江中公民館」の広報誌が2014年夏に合併発刊されたのを記念して、新しい広報誌のタイトルと題字デザインを公募したものです。このロゴマークを制作する上で私が一番重要視したのはロゴマークの募集要項にあった『まちづくり協議会のキャッチフレーズは「住みたくなる優しい街 春江中部」です。このまちに住む住民みんなが手をつなぐ「輪」と「和」のイメージを印象づけるものを求めます。』ということです。形は「輪」が春江中部を包み込むデザインで春江中部が一つになっているところをリボンのような結び目で表現しました。また、色は春江中部地区が文化・行政・商業の中心というところから明るく活発であり、春江中部の人たちの温かさ、今まで培ってきた文化を表現するためにロゴのような赤色をセレクトしました。私のデザインしたロゴマークがホームページや各種広報物など春江中部地区のまちづくりに使用されるのでとても嬉しいです。そして、これからも長く使われるロゴマークなので春江中部とひとつになり、たくさんの人に長く愛されるロゴマークになってほしいです。



図1 わ!ちゅうぶロゴマーク

結姫プロジェクトとして着物リメイクキットの研究・開発しました。

生活環境専攻 2回生 東 香里

結姫とは、企業との共同開発として考案した、古着の着物をリメイクすることで人と人のつながりを結び、人と着物を結び、過去と現在を結ぶことを目的としたキットのことです。また、そのキット考案に関わったメンバーのことを示します。

このプロジェクトで私たちは、結姫の裁縫キットを考えることはもちろん、その結姫というネーミングからロゴマーク、パッケージや作り方の説明書、宣伝用の映像等、全てのことを自分たちで一から考え、関わっていくことができました。こういった全てのことに関わっていくことができたのも、様々な分野のデザインを学ぶという、仁愛女子短期大学 生活環境専攻の特徴があったからこそできたことだと思います。最終的に提案した商品は、「巾着袋になるのし袋」^(図1)「うさぎのあずま袋」^(図2)「あそび広がるぬいぐるみ」の3つです。どれも他にはないような工夫がされています。また、ロゴマーク、パッケージ、作り方や映像には、共通性を持たせるために同じ赤色を使用したり、自分たちのキャラクター^(図3)を作っているところや登場させたりと、遊び心のつまったものになっています。

こうして自分たちが開発に関わったキットが実際に商品として販売されることになります。このキットを作り、誰かに贈ることによってその人との結び目をつくり、人とのつながりを広げていってほしい。そんな私たち結姫の想いがつまった、結姫キットがたくさんの人に届けられることを楽しみにしています。



図1 巾着袋になるのし袋



図2 パッケージ



図3 結姫のキャラクター

由利佳一郎氏プロデュース 福井の「匠」ファッションショーに出演。

生活環境専攻 2 回生 小林 加奈



図1 集合写真

福井の「匠」ファッションショーでは福井が誇る七つの伝統工芸を使用したファッションショーが行われました。世界的靴デザイナー「由利佳一郎」さんと福井県内の若手伝統工芸職人の新団体「七人の侍」とセーレン「マッシュマニア」によるコラボファッションショーでした。

モデルという経験はなかなか出来ないで緊張ばかりでした。しかし休み時間にウォーキングやポージング練習を行ったことで本番では上手いきました。ウォーキングはパリコレに出ているモデルさんを見習ったのですが音楽に合わせて歩く事は簡単ようで難しく普段の歩き方とは違うので苦労しました。本番では歩く直前まで緊張していましたがウォーキングを終えた友人が楽しそうな顔をしていたのを見て自分も楽しもうという気持ちで歩くことができました。本番を終えた後、観に来てくれた友達から「かっこよかったよ!」と声をかけてもらえてとても嬉しかったです。それと同時にこのファッションショー自体も大成功で終わってよかった、参加出来てよかったなと思いました。由利佳一郎さんの靴、青山眼鏡さんの眼鏡、山西浩二さんの帽子、セーレンの女性洋服ブランド「マッ



図2 ランウェイを歩きました。

シュマニア」など世界的デザイナーの商品を身近に触れる機会がありませんのでこのようなイベントで素材や作り方、デザインなどを知る事ができ今後の自分のデザインに活かしていこうと思いました。また、様々なデザイナーさんとデザインや人生経験談をお聞きする機会があり貴重なお話を聞く事ができとても良い刺激になりました。

たくさんの人が繋がり関わっていくことで出来ていった素敵なファッションショーになりました。

西武福井店主催イベント「メニーメニーミッフィー」の オリジナルミッフィーをデザインしました。

生活環境専攻 2 回生 橋本 春菜

ゴールデンウィーク期間中に福井西武店で「メニーメニーミッフィー ミッフィーの楽しいこといっぱい!」が開催されました。このイベントに生活環境専攻学生がデザインしたオリジナルミッフィーを出品しました。かわいいものからちょっとびっくりするものまで最初真っ白の姿だったミッフィーが、人の手が加わることでこんなにも多くの種類のミッフィーになったことに感動しました。そして自分オリジナルのミッフィーを制作できたことは発想を刺激する良い経験になりました。また、この時に制作したミッフィーをフクイ夢アートのJSDプロジェクトでも展示したところ、とてもたくさんの人の目に留まり「すごい!」「このミッフィーが好き」「これらは売っていないのですか?」と言う声を多く聞きました。自分たちのデザインに対する評価を直接聞くことができとても嬉しく思いました。そして、このように様々な人を喜ばせてくれるデザインの力を再認識することができました。



図1 福井西部店での展示風景

三國湊 帯のまち流し

生活環境専攻 2 回生 牧田 智香・高橋 由季子

帯のまち流しとは、毎年9月に坂井市三国町で行われている、三国節に合わせて踊り手たちが街を踊り流すお祭りです。私たちは、踊り手が着用する浴衣と手ぬぐいのデザインをして欲しいという依頼を三國會所よりいただきました。

浴衣をデザインするにあたって、三国は一体どういう街で何があるのか調べるところから始めました。三国の名所や特産品、歴史など現地に行き、浴衣にそういった要素を盛り込みたいと思いました。そこで、かつて三国で栄えていた北前船と、三国節の歌詞から連想される情景浴衣のデザインに落とし込みました。

手ぬぐいは、三国の有名な海水浴場であるサンセットビーチをもとにデザインをしました。幼い頃からなじみがあり、夕日が美しいサンセットビーチを表現しました。本来は手ぬぐいのデザインも浴衣のデザインを使う予定でしたが、浴衣と手ぬぐい別々に採用していただけた事がとてもうれしかったです。

本番当日では、多くの人が自分たちのデザインした、浴衣や手ぬぐいを身につけていた事に感動しました。三国は伝統的な町並みや文化が今でも残る街です。そうした文化を浴衣や手ぬぐいの柄として表現でき、伝えられたのが良かったと思います。地元の行事と直接関わることができ、とても良い経験になりました。自分たちの後輩にも、こういった活動にさらに関わって地元の良さを感じ、伝えていってほしいです。



図1 実際の浴衣と手ぬぐい

じんあいこどものくに

幼児教育学科

◆概要

日 時:平成26年10月18日(土) 9:30~16:00

会 場:仁愛女子短期大学 F館

幼児教育学科では、毎年の大学祭において子ども向けのアトラクションを集めた「じんあいこどものくに」と題する企画を催しています。この企画は、学生が主体となって子どもたちが楽しめる遊び場を企画・準備・実践する学びの機会として位置づけられています。ここでは、今回の取組の内容についてご紹介します。

◆クラス別開催内容

1回生Aクラス おつかいゲーム

1回生Bクラス キャラクター探し

1回生Cクラス 子どもアスレチック

2回生Aクラス 縁日

2回生Bクラス 風船・折り紙教室

2回生Cクラス 劇「おおきなかぶ」



大学祭のチラシ



受付



廊下の装飾



1 回生 A クラス おつかいゲーム



1 回生 B クラス キャラクター探し



2 回生 B クラス 風船・折り紙教室



1 回生 C クラス 子どもアスレチック



2 回生 A クラス 縁日



2 回生 C クラス 劇「おおきなかぶ」

◆学生の感想

1 回生 B クラス

キャラクターを見つけた時はもちろん、ゲームで正解し、シールをもらえた時の子どもたちはとても嬉しそうでした。私も嬉しくなりました。子どもが喜ぶと、保護者の方も笑顔になり、私達に「ありがとうございます」と感謝してくれました。保護者の方と関わる機会が今まであまりなかったので、良い体験ができたと思います。

2 回生 C クラス

実行委員である私は「練習を円滑に進めないといけない」「本番まで時間がない」と、とても焦っていました。そんな私を支えてくれたのがクラスのみんなでした。協力して準備をしてくれて、頑張ろうと声をかけてくれました。私はその声掛けに助けられ、当日までやっていくことができました。クラスのみんなには本当に感謝しています。本番も、子どもたちに喜んでもらえて、大成功だったと思います。

ボランティア活動報告

仁愛女子短期大学

パソコンボランティアサークル

生活情報専攻 2 回生
2014年度サークル長 角屋 晴香

パソコンボランティアサークル（以下、パソボラ）では、毎月第3土曜の午後に鯖江市社会福祉協議会（以下、社協）が主催する「障がい者のためのPC相談会」にスタッフとして参加しています。私はこのボランティア活動を通して、人と接することの大切さ、教えることの難しさを知ることができました。自分の思っていることを伝え、わかってもらうことは大変でした。しかし、毎回楽しく活動することができました。また、障がいを持った方々と接することで、相手の立場を考えて行動することができるようになったと思います。この活動でたくさんのことを学ぶことができ、とても良い経験になりました。この経験を糧に社会に出てからも頑張っていきたいです。

生活情報専攻 2 回生
2014年度会計担当 松田 優衣

私は、PCのことは全く分らなかったのですが、社協に行くことでPCの知識が身についたと思います。主にKさんのサポートをさせていただきましたが、Excelの難しい問題も解きました。授業で習ったことを復習でき、また分からないことを学ぶことも出来ました。PCのことだけではなく、障がい者の方への配慮の仕方など考えて行動することができ、様々な経験をする事が出来ました。今後パソボラで学んだことを普段の生活でも活かせるよう努力します。

生活情報専攻 1 回生
2015年度サークル長 友寄 未菜

1年間パソボラに所属し障がい者の方と触れ合う機会ができたことで、今までとは違う刺激をたくさん受けまし

た。はじめはどうしていいかわからなくて戸惑った部分もたくさんありましたが、PCを通して障がい者の方と触れ合ううちに自分の知識が人の役に立つ喜びをより感じる事ができました。スキルアップを目指して課題に取り組んでいる様子を見て、自分も見習うべきところがあり、自分を見つめなおす良い機会になりました。

生活情報専攻 1 回生
2015年度会計担当 清水 和佳奈

パソボラを通して自分の知識を人に教えることの難しさや楽しさを知ることができました。最初は自分も分からない機能が多くあたふたしましたが、どういう風にしたら上手く伝わるかを考え、徐々に自分から沢山お話もできるようになりました。自分の知識が少しでも役に立っていたら嬉しいなと思います。あまり回数は行けませんが1回1回が濃く、障がい者の方々とコミュニケーションすることができ大変さよりも楽しさの方が大きかったと感じます。この経験を二回生での活動でも活かしていきたいと思います。

ユネスコサークル

生活情報専攻 1 回生
松川 葵・宮川 奈緒美

私たちの活動は主に募金活動や献血補助活動があります。それは、仁愛女子大学の教職員、職員、学生、それに地域の方々など、多くの人が集まる大学祭（いわゆる「仁短祭」）の中で行われてきています。

今回、日本赤十字社の都合で献血補助活動は行われなかったため、主に募金活動について述べたいと思います。大学祭当日、午前中は募金箱をクラス模擬店の最前列の机の上に置き「募金活動を行っていますので、ご協力をお願いします。」と大きな声を出して、少しでも募金額

が多くなるように努力しました。しかし、募金はあまり多くなかったで、午後からは人の多いところを集中的に回ることになりました。その甲斐あって、午前よりも募金額も多くなりました。でも、期待していたほどではなかったで、クラスで話し合った結果、売り上げの一部を募金に回すことに決めました。

よくショッピングセンターなどの前で募金活動をしている人達を見かけます。大きな声を出してうるさいと思うこともありますが、いざ自分が募金活動を行ってみると、その大変さがよく分かります。いくら「お願いしま〜す!」と大きな声で言っても、なかなか集まるものではありません。その大変さが身にしみてよく分かりましたが、よい勉強になりました。



募金活動があまり上手いかなかったのには理由があります。一つは活動時間が短かったことです。もう少し時間をかければ、もっと多くの募金があったのではないかと思います。二つ目はぶっつけ本番で行ったので、多くの人に理解してもらえなかったことです。ユネスコサークルは募金活動もやっているという認識を多くの人に持ってもらっていると、もっと協力してもらえたのだらうと思います。三つ目は、私たちが固まって行っていたことです。それぞれが分散して活動を行っていれば、もっと効率的になったかもしれません。

いずれにしても、よい体験、そして勉強になりました。募金活動といえども、企画、立案など大切なことがあると実感した一日でした。

森田地区文化祭

栄養研究サークル

例年仁短祭と同時開催だった森田地区文化祭が、今年は仁短祭の1週間遅れで、会場も昨年までの森田小学校から森田公民館に変更となりました。天気がよく気持ちのよい日での開催となり、公民館前にはフラワーアレンジメントのコーナー、地元野菜の販売、焼きそばなどの販売がある中、栄養研究サークルでは恒例のパウンドケーキの販売をさせていただきました。販売開始は開会式後のことでしたが、その合図を待たずに買おうと意気込むお客様が一気に集まり、公民館の職員の方から待つように注意されるほどでした。販売開始となると一本売りのパウンドケーキは瞬く間に売り切れてしまいました。小学生が購入しやすいようにカット売りを多く用意しましたが、一本売りが売り切れたためにカット売りをまとめ買いするお客様が増え、こちらも30分で完売しました。来年はもっとサークルのメンバーを募り、栄養研究サークルならではの工夫を凝らしたおいしいパウンドケーキを多く提供できるようにしていきたいと思います。



もりた夢市

栄養研究サークル

栄養研究サークルでは、サークル活動として手作りパウンドケーキを「もりた夢市」で販売させていただきました。今年は11月9日に森田小学校の体育館で開催され、恒例となったパウンドケーキには開店前からお客様が並んでいました。パウンドケーキには、プレーン、ココアマーブルのほかに、福井県産さつまいもやほうれん草を使ったパウンドケーキも販売しました。放課後や土曜日を利用して、安全でおいしいパウンドケーキ作りに取り組んできました。お客様の期待に応えられるようたくさん用意したいのですが、どうしても限界があり、毎年のことながら20分で完売してしまいました。森田地区の方々はとても優しく、「また来年買いに来るね」「楽しみにしているよ」と声をかけてくださり、とても励みになりました。来年もまたサークル活動として「もりた夢市」に参加させていただき、楽しく盛り上げていきたいと思っています。

子育て応援団「すこやかふくい2014」

幼児教育学科 2 回生
竹本 真結

私は「すこやかふくい2014」にて、インフォメーションでの活動をしました。インフォメーションでの主な仕事は、会場アナウンス、ビラ配り、来場者の人数を数えるなどがあり、私は会場アナウンスをしました。メインステージでのイベントの呼びかけ、迷子のアナウンス、車の移動放送など、普段できないような活動を経験しました。

会場の方々に伝わるよう明るい声でハキハキと聞き取りやすいよう心がけ、取り組むことが大切だと学びました。また、迷子や車の移動の案内は、いつ訪れるか分からないので、練習なしでアナウンスしなければならない場面もありましたが、周りにいたスタッフの方やボランティアの方の優しい言葉がけのおかげで、焦らず臨機応変に活動することができました。初めて会ったスタッフの方々

とコミュニケーションを図ることができ、とても良い経験になりました。このボランティアを通して、たくさん子どもたちと関わることができ、ボランティア活動をしてよかったと思いました。また、ボランティアすることは、こんなに楽しいんだと気づくことができました。これからも色々なボランティア活動に参加したいです。



オレンジリボン運動

ボランティアサークル+幼児教育学科有志



平成26年11月16日に、オレンジリボン運動月間に合わせて開催された啓発活動（福井市子ども福祉課と共同開催）に参加しました。事前には、保育園の園長先生や行政の方に児童虐待について実際のお話をうかがって、

勉強会を行いました。それを踏まえて、児童虐待の実態やオレンジリボン運動について知ってもらうため、自分たちの思いなどを模造紙にまとめて当日掲示しました。その他、街頭で児童相談についての広告が入ったティッシュを配ったり、イベントで親子に資料・手作りのオレンジリボンの配布をしたりしました。

今回の活動を通して、初めてこの「オレンジリボン運動」というものを知りました。将来保育者として働いていくことを志しているの、事前の勉強会で保育所での実態など知ることができ、とても貴重な機会となりました。この活動を通して学んだことを、就職してからも役立てていきたいです。また、この活動を通して子ども達だけでなく、子育て中の親御さん、福井市の方などたくさんの人と関わることができ、とても良い経験になりました。活動中の子ども達の笑顔を見て、幸せそうにしている親御さんの姿が印象的でした。この運動をたくさんの方に知ってもらいたいため、これからも積極的に広めていきたいと思いました。



ボランティアサークル

幼児教育学科 2回生
山本 瑞季

ボランティアサークルでは、定期的に図書館でも活動をするともに、様々なイベントに参加し、子どもを対象としたレクリエーションや絵本の読み聞かせなどを行っています。

図書館での活動としては、絵本の読み聞かせや、制作活動、親子でできる触れ合い遊びなどを実施しています。主な参加者は、子どもは未就園児から小学生まで幅広く、休日に実施することで家族そろって参加していただくことも多いです。そのため、絵本を1つ用意することでも、皆が理解し楽しめるようにするには、と悩むことも少なくありません。制作やレクリエーションをするときには、子どもがやりたい、楽しいと思えるように工夫し、また難しいと思えるところについては保護者の方にも一緒に協力してもらいます。そのような関わりを通して、私たち学生のみでなく、みんなでコミュニケーションをとりながら活動を進めていくことができます。

今年はオレンジリボン（児童虐待防止）を呼びかける活動にも参加をしました。各活動後には反省会も行い、新しく授業で学んだことも取り入れながら、次の活動がより良くなるように努力をしています。実際に子どもや保護者と関わりあえることもあり、将来につながる貴重な経験となっています。



折り紙研究会

幼児教育学科 2回生
塚谷 奈実



折り紙研究会では、定期的に福井大学医学部附属病院小児科の入院病棟プレイルームに飾る壁紙作りをしています。また、図書館や公民館などでの折り紙教室も行いました。

あわら図書館でのボランティアでは、クリスマスが近かったということで、小学生を対象にツリーとその飾りを作りました。一人ひとりがしっかりと練習をし、子どもに教えられるようにしました。

実際にやってみて、練習したかいもあって、上手く教えることができました。しかし、難しい折り方もあって、教えることがうまくできなかったものもありました。自分自身が折り方を覚えるだけでなく、どのようにして教えるかを考え、準備や練習を十分にして臨む大切さを学びました。しっかりと教えられるか不安もありましたが、子ども達もとても喜んで作っていたので、嬉しく思いました。

私達の企画で子ども達が楽しんで作って満足した様子が見られたので、ボランティアに参加してとてもいい経験になりました。

おもちゃサークル

幼児教育学科 2回生
嶋田 有咲

おもちゃサークルの活動として、上志比児童館でパラバルーンを使った遊びを行いました。普段あまり関わる事のない小学生との交流だったため、活動内容を考える際に、簡単すぎても難しすぎても楽しめないと思い、どのように進めていけばよいのかとても悩みました。

パラバルーンを初めて使うという子どもが多く、不安を抱えながら活動を始めましたが、いざ行ってみると、仲間とのふれあいの中から、とても楽しそうな表情を見せてくれる子どもばかりで、私自身も楽しみながら活動を行うことができました。しかし、何度注意してもふざけてしまう子どももいて、小学生に対する注意の仕方がわからなく、どのような対応や声かけをすれば良いのかわかりませんでした。それでも、最後にはそのような子どもたちからも楽しかったという声が聞けたので、ボランティア活動ができてよかったと思いました。

このボランティア活動を通して、年齢に合った遊びを考え、子どもたちみんなが楽しめるような声かけをする大変さを学びました。それとともに、環境構成や準備をよく考えておくことがとても大切だとわかりました。子どもに遊びの楽しさを伝えるということは難しいことですが、その分やりがいもあると思うので、この経験をこれからの保育へと活かしていきたいです。



平成26年度 地域活動実践センター活動報告

● 管理栄養士国家試験対策リカレント講座

	開講日	教科 1限18:30~19:30・2限19:40~20:40	講 師 (敬称略)	受講者数
第1回	8月23日(土)	第1回 全国統一模擬試験	牧野・吉田	21
第2回	9月18日(木)	食べ物と健康-1(調理)	谷 洋子	19
第3回	9月25日(木)	食べ物と健康-2(食品)	加藤 隆夫	16
第4回	10月 2日(木)	食べ物と健康-3(食品衛生)	加藤 隆夫	13
第5回	10月 4日(土)	第2回 全国統一模擬試験	牧野・吉田	20
第6回	10月 9日(木)	臨床栄養学(栄養)	吉田 弘子	17
第7回	10月15日(水)	基礎栄養学	岩田 章子	16
第8回	10月23日(木)	生化学	谷 政八	15
第9回	10月30日(木)	社会・環境と健康-1	出口 洋二	12
第10回	11月 6日(木)	社会・環境と健康-2	出口 洋二	11
第11回	11月20日(木)	応用栄養学	牧野 みゆき	11
第12回	11月22日(土)	第3回 全国統一模擬試験	牧野・吉田	21
第13回	11月27日(木)	栄養教育論	牧野 みゆき	13
第14回	12月 4日(木)	人体の機能と栄養(解剖生理学)	齋藤 正一	10
第15回	12月11日(木)	人体の構造と疾患(病理)	齋藤 正一	11
第16回	12月18日(木)	臨床栄養学(診断)	齋藤 正一	7
第17回	1月 8日(木)	公衆栄養学	牧野 みゆき	10
第18回	1月15日(木)	給食経営管理論-1	桑野 洋子	10
第19回	1月22日(木)	給食経営管理論-2	桑野 洋子	8
第20回	1月24日(土)	第4回 全国統一模擬試験	牧野・吉田	23

● 講師派遣

日 時	講師氏名	テーマ	依頼団体
6月14日	出村 友寛	運動遊び・歌遊び	越前市保育研究会
8月29日	増田 翼	親子も地域もつながって子どもの未来を考えよう!	子ども家庭センター 子育て支援室・相談室
12月20日	岸松 静代	親と子のデコレーションケーキづくり	仁愛附属幼稚園
1月31日	乙部 貴幸	発達の違いと障害、その対応について	ふじしま保育園

● 学生の社会的活動の実績件数と参加人数の報告

参加した活動の状況					参加した学生の状況	
活動名	活動日時	活動場所	主催団体	活動の対象	活動サークル・学科の名称	参加人数
障害児ボランティア	4月2日・3日	たけのこ園	たけのこ園	障害児	幼児教育学科	2
「ミッフィー展」での絵本の読み聞かせ	5月3日～6日	西武福井	西武福井	子どもとその保護者	幼児教育学科	14
子どもワークショップ	6月1日・8日・22日・7月6日	SSTらんど	特定非営利活動法人 楽放課後楽校	幼児・小学生	幼児教育学科	7
保育ボランティア	4月～3月	保育園・幼稚園・施設	保育園・幼稚園・施設	幼児	幼児教育学科	150
ふくいエコキャップ運動	5月	仁愛女子短期大学	ふくいエコキャップ運動委員会	仁愛女子短期大学	学生会役員	8
夏祭り	7月5日～13日	すずらん保育園	すずらん保育園	幼児	幼児教育学科	3
もりた夢駅 ～夏物語り～	7月15日	JR森田駅	森田地区文化委員会	一般住民	生活環境専攻	40
森田まつり エコキャンドル	7月26日	九頭竜川河川敷	福井北商工会青年部 森田公民館	一般住民	生活環境専攻	10
障がい者のためのパソコン相談会	毎月 第三土曜日	鯖江市社会福祉協議会 鳥羽事業所	鯖江市社会福祉協議会	身体障がい者の方と その家族	パソコンボランティア サークル	31
季節の壁面飾り作り	毎週火曜日	A401	公益財団法人 がんの子どもを守る会	入院している児童	折り紙研究会	60
使用済切手・書き損じ葉書回収活動 (学内数カ所にボックス設置)	1年間	仁愛女子短期大学	仁愛女子短大ユネスコクラブ	仁愛女子短大学生、 (教)職員	ユネスコクラブ	5
大学祭活動 (募金、書き損じ葉書回収活動)	10月18日	仁愛女子短期大学	仁愛女子短大ユネスコクラブ	仁愛女子短大学生と (教)職員、来学者	ユネスコクラブ	34
ふくい夢アート2014	10月5日～ 10月26日	福井駅前周辺	福井市 ふくい夢アート実行委員会	一般	生活環境専攻	191
森田地区文化祭	10月25日	森田公民館	森田地区文化委員会・ 森田公民館	森田地区住民	食物栄養サークル 書道サークル	4
松本まつり2014	10月26日	松本小学校体育館	松本まつり実行委員会	一般	茶道サークル	4
もりた夢市	11月9日	森田小学校	森田地区活性化委員会	森田地区住民	食物栄養サークル	3
学生によるオレンジリボン運動	11月16日	「ふく+」及び福井駅周辺	福井市、福井市男女共同参画子ども家庭センター 子育て支援室、仁愛女子短期大学	一般	ボランティアサークル・ 幼児教育学科	19
すこやかふくい2014	11月29日・30日	福井県産業会館	子育て応援団実行委員会	子どもとその保護者、 一般	幼児教育学科	73
福井市消費者まつり	11月30日	フェニックスプラザ	福井市	幼児	折り紙研究会	6
あわら図書館での折り紙教室	12月20日	あわら図書館	あわら図書館	幼児	折り紙研究会	9
はなぞの地域もちつき大会	1月17日	花園保育園	花園保育園	子ども、一般	幼児教育学科	8

※当センターでの把握のみ ※人数は延べ人数です

●平成26年度 教員免許状更新講習

仁愛女子短期大学が、平成26年度に実施した教員免許状更新講習「教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項（必修）」・「教科指導、生徒指導その他教育の充実に関する事項（選択）」の概要は次の通りである。

必修	講習名	教育の最新事情
	認定番号	平26-35162-00016号
	講師	重村幹夫（本学幼児教育学科教授） ・松川恵子（本学幼児教育学科教授） 青井夕貴（仁愛大学子ども教育学科准教授）・乙部貴幸（本学幼児教育学科准教授） 田中洋一（本学生活科学学科教授） ・前田敬子（本学幼児教育学科准教授） 増田翼（本学幼児教育学科講師） ・ゲストスピーカー山下清美（仁愛附属幼稚園長）
	講習の目標・ねらい	「教職についての省察」「子どもの変化についての理解」「教育政策の動向についての理解」「学校の内外における連携協力についての理解」の4つの事項について、教員に求められる最新の知識・技能の修得と今日的な教育課題についての理解を深めることを目指す。
	講習会場	仁愛女子短期大学
	日程	平成26年8月21日（木）・22日（金）9:00～16:10
	受講者数	97人

講習②	講習名	子どもの音楽的感性を育む実践指導
	認定番号	平26-35162-50101号
	講師	大久保功治（本学幼児教育学科教授）・木下由香（本学幼児教育学科准教授） 河野久寿（本学幼児教育学科准教授）
	講習の目標・ねらい	子どもたちの発達に応じた音楽表現活動の意義を理解し、自然な音楽活動を通して、伸びやかな音楽的感性を育成する実践的な指導について学ぶ。具体的には、①楽器を使った創造的音楽活動の実際、②和声的なアプローチから教材としての楽曲の理解を深めた音楽表現、③器楽合奏編曲の基礎と器楽合奏の指導法について学ぶ。
	講習会場	仁愛女子短期大学 A106教室及びE401演奏ホール
	日程	平成26年8月5日（火）9:20～16:40
	受講者数	39人

講習③	講習名	子どもの遊び ～おもちゃと運動～
	認定番号	平26-35162-50102号
	講師	重村幹夫（本学幼児教育学科教授）・出村友寛（本学幼児教育学科講師） ゲストスピーカー香月拓（本学幼児教育学科講師）
	講習の目標・ねらい	子どもの遊びを「おもちゃ」と「運動」の面から学ぶことを目的とする。「おもちゃ」では、幼児教育における『おもちゃのチカラ』についての理解を深めるとともに、身近な素材を用いて実際におもちゃを製作する。「運動」では、子どもの運動遊びと体力の発達について学ぶとともに、自身の体力測定を行い、結果を分析評価する。
	講習会場	仁愛女子短期大学 B108教室及び体育館
	日程	平成26年8月7日（木）9:00～16:30
	受講者数	44人

おわりに

地域活動実践センター長 重村 幹夫

『SOCIUS』について

本誌「SOCIUS」は禿正宣学長が名づけました。「SOCIUS」とは、ラテン語で「仲間・友」を意味するそうです。この言葉から「societas」という「親交・友愛・絆」を意味する言葉ができ、社会を意味するsocietyという英語が生まれたと言われています。また、SOCIUSという言葉は「分かち合っている・結びつけられた」という意味を持つ形容詞でもあります。当センターが地域と短大を結び合わせることによって、新しい仲間が増え、つながり合い、愛や絆が無意識的に感じられるような「社会づくり」を目指したいという願いが込められているということです。

当センターは生活科学学科・幼児教育学科・音楽学科に設置されていたそれぞれの研究センターを平成18年4月に「地域活動実践センター」に統合して設立されました。「はじめに」でも記しましたが、その目的は、仁愛女子短期大学の建学の精神である「仁愛兼済」を実践するため、本学が保有する知識等の資源を地域社会に提供し、地域社会の発展と文化の向上に資することです。

平成26年度の主な活動として、①公開講座・講習会の開催、②地域の教育活動を支援するための教職員派遣、③本学と森田地区まちづくり協議会との連携、④教職員・学生のボランティア活動の支援、⑤AOSSAの「子育て支援室・相談室」の協力・支援、⑥教員免許状更新講習の開催、⑦機関誌の発行等の事業に取り組みました。

これからさらに本センターが地域に貢献するためには、本学が有している教育資源をどのように活用するかについて、その方策を考えなければならないと思います。そのためにも今後とも、関係者の皆様のご協力とご理解をよろしくお願いいたします。